

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第103集

若宮遺跡(Ⅱ) 内田古窯

豊橋牟呂坂津土地地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2009年3月

豊橋市教育委員会

わか みや い せき
若宮遺跡(Ⅱ)
うち だ こ よう
内田古窯

豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書

2009年3月

豊橋市教育委員会



1. 調査区全景-1 (上から)



2. 調査区全景-2 (北から)



1. 調査区全景-3 (北から)



2. 調査区全景-4 (西から)



1. 調査区全景-5 (段丘斜面 西から)



2. 調査区全景-6 (段丘斜面 北から)

カラー写真図版 4



1. 調査区全景ー7 (段丘斜面 南から)



2. 貝塚部分完掘状況ー1 (段丘斜面 北から)



1. 貝塚部分完掘状況-2 (段丘斜面 北から)



2. 貝塚部分完掘状況-3 (段丘斜面 南から)



1. 内田1～3号窯完掘状況(上から)



2. 内田4号窯床面検出時(西から)



2. 内田 4 号窯完掘状況(西から)



2. 内田古窯出土埴輪

例 言

1. 本書は、豊橋市牟呂町字坂津3番地他において豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴い事前に実施した若宮遺跡の2次調査及び内田古窯の発掘調査報告書である。平成18年度の調査は若宮遺跡・内田古窯・内田貝塚を対象に行い、調査期間は平成17年5月9日～平成18年3月29日、調査総面積は3,500㎡である。

2. 発掘調査は豊橋市教育委員会が行った。遺跡ごとの調査担当は以下のとおりである。

遺跡名	調査担当
若宮遺跡（1次調査）	荻谷史穂（教育部美術博物館嘱託職員）
内田古窯1～3号窯	岩瀬彰利（教育部美術博物館・当時）
内田古窯4号窯	荻谷史穂
内田貝塚	岩瀬彰利・荻谷史穂

3. 発掘調査及び報告書の作成に際して、土地所有者をはじめ地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。本書の執筆に際して、下記の各氏にご教示を頂いている。記して感謝の意を表す次第である。

岡村道雄（奈良文化財研究所）、梶原義実（名古屋大学）、鐘方正樹（奈良市埋蔵文化財センター）、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、車崎正彦（早稲田大学）、鈴木敏則（浜松市役所）、坪根伸也（大分市教育委員会）、高橋和成（秋田県埋蔵文化財センター）、中野晴久（常滑市歴史民俗資料館）、西本和哉（奈良大学大学院）、橋本輝彦（桜井市教育委員会）、原田 幹（愛知県教育委員会）、松宮昌樹（桜井市教育委員会）、向坂鋼二（静岡県考古学会）、森岡秀人（芦屋市教育委員会）

4. 写真撮影については、発掘調査は各担当が行ったが、航空写真撮影は株式会社G I S中部に委託して行っている。また出土遺物は荻谷が行った。

5. 本書の執筆は以下のとおりである。編集は荻谷・岩原剛・賛元洋（教育部美術博物館）が行った。

第1章（2を除く）、第2章、第4章1～3	岩瀬彰利（教育部学校教育課）
第3章、第4章4～6	荻谷史穂
第3章2の一部、第4章4～6の一部、第6章1・2	岩原 剛
第6章3	賛 元洋
第5章	㈱パレオ・ラボ

6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。

7. 調査にあたって作成した写真・カラスライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地	1
2. 歴史的環境	2

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過	5
2. 調査の経過と方法	5

第3章 若宮遺跡

1. 遺構	
A. 建物	8
B. 土壌	19
C. その他の遺構	22
2. 遺物	
A. 建物	30
B. 土壌	31
C. 溝	31
D. その他の遺構	36

第4章 内田古窯

1. 1号窯	55
2. 2号窯	57
3. 3号窯	60
4. 4号窯	64
5. 関連遺構	67
6. 出土遺物	68

第5章 自然科学分析

1. 内田古窯の放射性炭素年代測定	87
2. 埴輪及び埴輪窯壁材の胎土材料	91
3. 内田古窯内スサの植物珪酸体分析	99

第6章 総 括

1. 内田古窯出土埴輪の編年の位置づけと評価	
------------------------------	--

A. 出土埴輪からみた窯の時期関係	101
B. 窯の構造について	102
C. 円筒埴輪の時間的位置づけ	102
D. 内田古窯の歴史的背景	103
2. 遺構の変遷	105
3. 牟呂貝塚群出土の弥生土器と古墳時代土師器	
A. 牟呂貝塚群の概要	109
B. 各貝塚の概要	110
C. 牟呂貝塚群の弥生土器	126
D. 牟呂貝塚群の古墳時代土師器	130
E. 牟呂貝塚群の形成と変遷	131

挿 図 目 次

第1図	豊橋市周辺地形分類図 (1/200,000)	1
第2図	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4
第3図	調査区位置図 (1/2,500)	7
第4図	調査区全体図 (1/250)	9
第5図	S B050実測図 (1/60)	13
第6図	S B050竈 (S X062) 実測図 (1/40)	14
第7図	S B055実測図-1 (1/40)	14
第8図	S B055実測図-2 (1/40)	15
第9図	S B060実測図 (1/40)	16
第10図	S B090実測図 (1/60)	17
第11図	S B147実測図-1 (1/60)	17
第12図	S B147実測図-2 (1/60)	20
第13図	S B015実測図 (1/60)	21
第14図	S B220・S X204実測図-1 (1/40)	23
第15図	S B220・S X204実測図-2 (1/40)	25
第16図	S X005・036・038・065・146実測図 (1/60)	27
第17図	S X040・070実測図 (1/80)	28
第18図	S X247実測図 (1/80)	29
第19図	出土遺物実測図-1 (1/2・1/3)	32
第20図	出土遺物実測図-2 (1/3)	33
第21図	出土遺物実測図-3 (1/2・1/3・1/8)	35
第22図	出土遺物実測図-4 (1/3)	38
第23図	出土遺物実測図-5 (1/3)	39
第24図	出土遺物実測図-6 (1/3)	41
第25図	出土遺物実測図-7 (1/3)	43
第26図	出土遺物実測図-8 (1/3・1/8)	44
第27図	1号窯平面図・断面図 (1/40)	56
第28図	2号窯平面図・断面図 (1/40)	58
第29図	2号窯遺物出土状況図 (1/40)	59
第30図	3号窯平面図・断面図 (1/40)	61
第31図	3号窯遺物出土状況図 (1/40)	63
第32図	4号窯実測図 (1/40)	65
第33図	S X233実測図 (1/80)	69
第34図	円筒埴輪の属性 (1/3)	71
第35図	円筒埴輪の諸特徴 (1/3)	73

第36図	1・2号窯出土遺物実測図(1/3)	75
第37図	2号窯出土遺物実測図-1(1/3)	76
第38図	2号窯出土遺物実測図-2(1/3)	77
第39図	3号窯出土遺物実測図(1/3)	79
第40図	4号窯・SX233・斜面表出土遺物実測図(1/3)	81
第41図	暦年校正結果	90
第42図	豊川中・下流域の地質図(日本の地質『中部地方Ⅱ』編集委員会編、1988より引用)	97
第43図	埴輪胎土および埴輪窯壁材の偏光顕微鏡写真	98
第44図	内田古窯の機動細胞珪酸体	100
第45図	周辺地域出土埴輪(1/5)	103
第46図	若宮遺跡遺構変遷図-1(1/600)	107
第47図	若宮遺跡遺構変遷図-2(1/600)	108
第48図	牟呂貝塚群位置図(1/10,000)	111
第49図	内田貝塚の弥生土器-1(1/4)	112
第50図	内田貝塚の弥生土器-2・古墳時代土師器(1/4)	113
第51図	水神第1貝塚の弥生土器・古墳時代土師器(1/4)	114
第52図	水神第2貝塚の弥生土器-1(1/4)	116
第53図	水神第2貝塚の弥生土器-2・古墳時代土師器(1/4)	117
第54図	大西貝塚の古墳時代土師器-1(1/4)	118
第55図	大西貝塚の古墳時代土師器-2(1/4)	119
第56図	大西貝塚の古墳時代土師器-3(1/4)	120
第57図	大西貝塚の古墳時代土師器-4(1/4)	121
第58図	さんまい貝塚の弥生土器(1/4)	123
第59図	さんまい貝塚の古墳時代土師器(1/4)	124
第60図	市杵嶋神社貝塚の弥生土器(1/4)	126
第61図	市杵嶋神社貝塚の古墳時代土師器-1(1/4)	127
第62図	市杵嶋神社貝塚の古墳時代土師器-2(1/4)	128

表 目 次

表1	若宮遺跡出土遺物観察表	46
表2	内田古窯出土遺物観察表	82
表3	測定資料及び処理	87
表4	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	88
表5	材料を検討した埴輪と埴輪窯壁材とその特徴	91
表6	埴輪胎土および埴輪壁材中の粘土および砂粒の特徴	95
表7	土器胎土および粘土塊中の岩石片と組み合わせ	95

カラー写真図版目次

図版1-1	調査区全景-1(北から)	2	調査区全景-2(北から)
図版2-1	調査区全景-3(北から)	2	調査区全景-4(西から)
図版3-1	調査区全景-5(段丘斜面 西から)	2	調査区全景-6(段丘斜面 北から)
図版4-1	調査区全景-7(段丘斜面 南から)	2	貝塚部分完掘状況-1(段丘斜面 北から)
図版5-1	貝塚部分完掘状況-2(段丘斜面 北から)		
	2	貝塚部分完掘状況-3(段丘斜面 南から)	
図版6-1	内田1~3号窯完掘状況(上から)	2	内田4号窯床面検出時(西から)
図版7	内田4号窯完掘状況(西から)		
図版8	内田古窯出土埴輪		

写真図版目次

図版1-1	若宮遺跡発掘調査前(北から)	2	内田貝塚・段丘発掘調査前(北から)
図版2-1	調査前貝塚断面露出状況(北から)	2	若宮遺跡完掘状況(北から)
図版3-1	掘削状況-1(北から)	2	掘削状況-2(南から)
図版4-1	近世貝塚検出状況-1(北から)	2	近世貝層検出状況-2(北から)
図版5-1	古墳時代貝層検出状況(北から)	2	貝層完掘状況(北から)
図版6-1	遺構検出状況(東から)	2	SB015(南西から)
図版7-1	SB015完掘状況(南から)	2	SB050遺物出土状況-1(南から)
図版8-1	SB050遺物出土状況-2(南から)	2	SB050竈(SX062)土層(南から)
図版9-1	SB050(SX057)遺物出土状況(南から)	2	SB050完掘状況-1(上から)
図版10-1	SB050完掘状況-2(南から)	2	SB055完掘状況(南から)
図版11-1	SB055検出状況(南から)	2	SB055遺物出土状況-1(南から)
図版12-1	SB055遺物出土状況-2(南から)	2	SB055床面検出状況(南から)
図版13-1	SB055完掘状況-2(南から)	2	SB060完掘状況-1(上から)
図版14-1	SB060完掘状況-2(南から)	2	SX247(南から)
図版15-1	SB220完掘状況(上から)	2	SD001土層断面(南から)
図版16-1	SE115土層断面(西から)	2	SE166掘削状況(南から)
図版17-1	SX038完掘状況(北から)	2	SX040土層断面(北から)
図版18-1	SX040完掘状況(南から)	2	SX040・070完掘状況(南から)
図版19-1	SX120土層断面(東から)	2	SX116土層断面(西から)
図版20-1	SX065土層断面(西から)	2	SX154・161土層断面(南から)

図版21-1	SX154集石(東から)	2	SX161集石(東から)
図版22-1	SX164遺物出土状況(南から)	2	SX230遺物出土状況(南から)
図版23-1	SX231遺物出土状況-1(南から)	2	SX231遺物出土状況-2(北から)
図版24-1	SX145完掘状況-1(北から)	2	SX145完掘状況-2(北から)
図版25-1	Tr5 南壁土層断面(南東から)	2	SD035・045西壁土層断面(西から)
図版26-1	SX233遺物出土状況-1(北から)	2	SX233遺物出土状況-1近景(北から)
図版27-1	SX233遺物出土状況-2(北から)	2	SX233遺物出土状況-2近景(北から)
図版28-1	SX233北壁土層断面(北東から)	2	SX233西壁土層断面(北から)
図版29-1	SX233完掘状況(南から)	2	SX233完掘状況(北から)
図版30-1	1号窯埴輪出土状況(北から)	2	2号窯埴輪出土状況(北から)
図版31-1	2号窯c-c'ライン土層断面(東から)	2	1・2号窯全景(西から)
図版32-1	3号窯a-a'ライン土層断面(西から)		
	2 3号窯中層埴輪出土状況d-d'ライン(西から)		
図版33-1	2号窯遺物出土状況(北から)	2	2号窯断ち割り後全景(西から)
図版34-1	3号窯中層埴輪出土状況(上から)	2	3号窯全景(西から)
図版35-1	3号窯断ち割り後全景(西から)	2	3号窯焼部断ち割り(西から)
図版36-1	SX239・245・250、4号窯検出時(北から)		
	2 4号窯土層断面(西から)		
図版37-1	4号窯遺物出土状況-1	2	4号窯遺物出土状況-2
図版38-1	4号窯遺物出土状況-3	2	4号窯遺物出土状況-4
図版39-1	4号窯遺物出土状況-5	2	4号窯完掘状況(西から)
図版40-1	1号窯全景(東から)	2	2号窯遺物出土状況(東から)
	3 3号窯全景(西から)	4	3号窯全景(東から)
図版41-1	4号窯掘削状況(北西から)	2	4号窯断ち割り後全景(北西から)
図版42-1	1~3号窯全景(西から)	2	4号窯完掘状況(西から)
	3 北側段丘斜面遺構完掘状況(西から)		
図版43	出土遺物-1(若宮遺跡)		
図版44	出土遺物-2(若宮遺跡)		
図版45	出土遺物-3(若宮遺跡)		
図版46	出土遺物-4(若宮遺跡)		
図版47	出土遺物-5(若宮遺跡)		
図版48	1・2号窯出土埴輪(内田古窯)		
図版49	2号窯出土埴輪-1(内田古窯)		
図版50	2号窯出土埴輪-2(内田古窯)		
図版51	3号窯出土埴輪(内田古窯)		
図版52	4号窯・SX233・表土出土埴輪(内田古窯)		

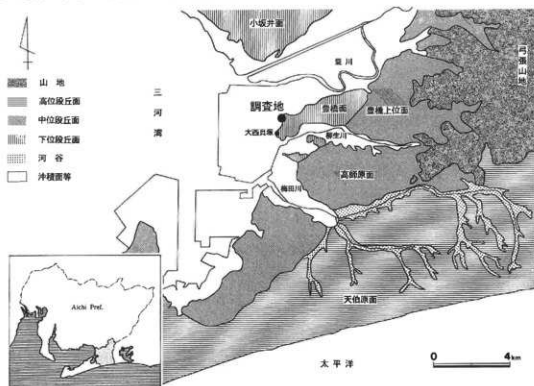
第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (第1図)

今回調査を行った若宮遺跡・内田古窯・内田貝塚は豊橋市牟呂町字若宮・内田に所在する集落跡・窯跡・貝塚である(第1図)。豊橋市は東が弓張山地、南が太平洋、西が三河湾にそれぞれ面し、平野部は限られている。市域北側は一級河川である豊川が三河湾に向かって西流し、市域の大半は豊川と現在浜松市を貫流する天竜川の前身、古天竜川によって造られた河岸段丘上に位置している。河岸段丘は高位面(天伯原面・標高30~60m)、中位面(高師原面・豊橋上位面・標高15~30m)、低位面(豊橋面・標高4~10m)の3面に大きく分けることができる。

遺跡の所在する牟呂地区は豊川左岸の河岸段丘(低位面)の先端部にあり、前方に三河湾を臨み、北には豊川が流れている。この段丘は先端部分で幅が約1kmと細く、標高は6m前後と低い。若宮遺跡等は段丘先端の北側にあり、この辺りは標高が8~12mと低位段丘のなかで最も高い。段丘の端部は比高差5mほどの段丘崖になっており、段丘上部は平坦面が続いて民家や畑になっている。段丘崖の西側は現在では住宅が点在しているが、かつては一面に水田が広がっていた。この段丘崖の西はかつては三河湾で、江戸時代の新田開発によって干拓された場所である。近年までは、この地区は海苔や貝加工などの沿岸漁業が盛んな地域であった。

若宮遺跡は段丘上の集落跡、内田古窯は段丘崖に設けられた埴輪専焼窯、内田貝塚は段丘崖西側の砂堆(当時の海浜部)上に形成された貝塚である。これら3遺跡は、三河湾の近くに所在する海浜部立地の遺跡であり、三河湾との深い関係が指摘できる。



第1図 豊橋市周辺地形分類図 (1/200,000)

2. 歴史的環境 (第2図)

若宮遺跡・内田古窯が所在する牟呂坂津地区とその周辺部は、縄文時代から各時代の遺跡が多く残された遺跡の密集地である。ここでは、周辺の遺跡について説明する(第3図)。

縄文時代

縄文時代の貝塚は、内田貝塚(3)、大西貝塚(6)をはじめとする牟呂貝塚群や王ヶ崎貝塚(9)、小浜貝塚(10)などが確認されている。このうち王ヶ崎・小浜貝塚は大西貝塚等の段丘と柳生川を挟んで対面する低位段丘に位置している。これらの貝塚は晩期を中心として形成されている。

牟呂貝塚群は加工場型貝塚と考えられる。坂津寺貝塚(2)はハマグリが主体で縄文時代中期中葉～後期初頭及び晩期の土器が出土している。現在までに牟呂地区で確認されている最古の遺跡である。水神第1貝塚(4)は沖積地に立地し、縄文時代晩期前葉～中葉を中心とした遺跡であることが確認されている。遺物には弓筈状角製品・ヤスの骨角器等が出土している。水神第2貝塚(5)は砂堤上に位置し、貝塚は規模約50×20mで平面形は隅丸方形をなしていた。貝層はハマグリが99%を占める純貝層で、地床炉址は約400ヶ所を数えた。市杵嶋神社貝塚(8)は前方後方墳の墳丘中に残存している貝塚である。大西貝塚は規模約185×40mの平面形がく字状をなすハマグリ主体の貝塚で、東海地方最大の貝塚である。集石・土壙・地床炉などが多数検出された。さんまい貝塚(7)もハマグリ主体の晩期中葉の貝塚である。以上のうち、水神第1・第2貝塚・大西貝塚では多数の炉が検出され、土器以外の石器、骨角器などの遺物が極端に少ないなどの共通点がある。

小浜貝塚は4カ所の貝塚からなる地点貝塚であったといわれ、縄文時代前期～晩期の長期に渡る貝塚である。土器や石器、貝製品のほか、屈葬人骨が検出されている。王ヶ崎貝塚は晩期の貝塚である。発掘調査は行われていないが、隣接する磯辺王塚古墳の発掘調査の際、条痕文土器と磨製石斧が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、王ヶ崎貝塚、橋良遺跡(11)や見丁塚遺跡(12)などがある。王ヶ崎貝塚では遠賀川系土器が出土している。橋良遺跡は中期後葉における柳生川流域の拠点集落で、環壕や堅穴住居、方形周溝墓などが検出され、土器・石器が豊富に出土している。また見丁塚遺跡では集落遺構は確認されておらず、中期後葉の方形周溝墓が検出されている。この他に境松遺跡(13)、水神第2貝塚や内田貝塚から土器などが出土している。これらは臨海部の遺跡であるにもかかわらず、貝塚を形成していない点が特筆される。なお、水神第2貝塚では奄美大島以南でしか採れないイモガイ製の貝輪が出土しており、縦型としては分布の東限にあたり、注意される。

古墳時代

古墳時代の集落遺跡では、大海津遺跡(24)、大西遺跡(25)、橋良遺跡、見丁塚遺跡などで、堅穴住居や掘立柱建物などが確認されているが、集落の全容が明らかな例は無い。橋良遺跡では前期後葉の堅穴

住居が検出され、土師器のS字甕とともに畿内系高坏や山陰系甕が出土した。また大西遺跡は、7世紀中葉～後葉の掘立柱建物を主体とする比較的規模が大きな遺跡である。直径90cmの大型柱穴を持った建物や大壁住居と想定される特殊建物などがあり、首長居館を含む拠点的な集落遺跡と推定される。

古墳では、首長墓として市杵嶋神社古墳(20)、三ツ山古墳(14)、牟呂王塚古墳(19)、磯辺王塚古墳(21)があり、群集墳として東脇古墳(17)や権現神社古墳(18)などがある。

市杵嶋神社古墳は前期前葉の前方後方墳で、全長は60m前後と推定され、葺石を伴う。同時期には豊川の上流域・中流域でも前方後方墳が存在しており、豊川流域には3ヵ所の首長所在拠点があったことが分かる。その後、古墳時代中期には大型首長墓は豊川右岸に集中しており、左岸に相当する豊橋市域では顕著な古墳は見いだしにくい。

周辺地域で首長墓が再び確認されるようになるのは、後期に入ってからである。三ツ山古墳は6世紀前葉の全長37mの前方後円墳である。主体部は後円部と前方部にそれぞれ存在し、前方部の主体部からは鉄製甕や須恵器が出土している。磯辺王塚古墳は6世紀後葉の首長墓で、墳形は明らかではないが、大型の横穴式石室を持つ。副葬品として双龍環頭大刀、頭椎大刀、銀象嵌装束頭大刀など4振の飾大刀や金銅装馬具、トンボ玉など豊富な装身具類が出土した。また牟呂王塚古墳は6世紀末葉の首長墓で、検出長27mの前方後円墳である。圭頭大刀や金銅装馬具などきらびやかな副葬品が出土している。周辺の後期首長墓は瀬美湾沿岸の首長系譜の一端を占め、副葬品に金銅装製品が卓越することから、後期以降に地域と倭王権との関わりが深くなったことをものとする。

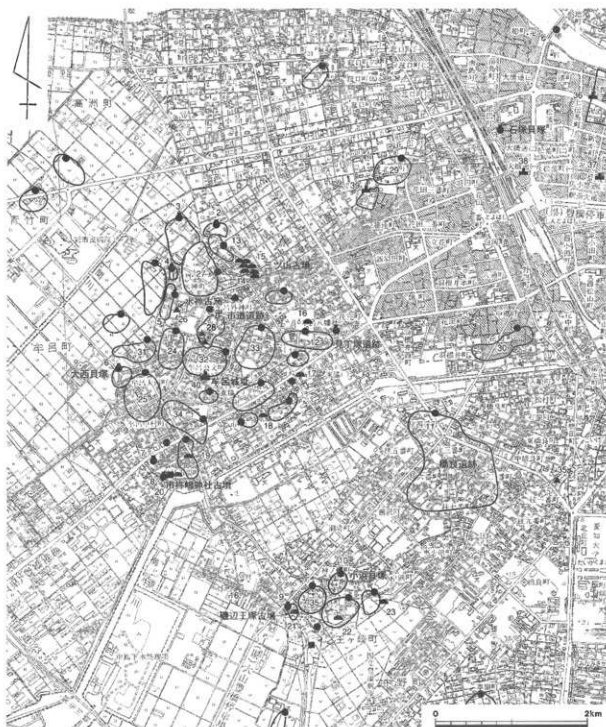
以上のほか、須恵器と埴輪を併焼した窯跡として水神古窯(26)がある。6世紀初頭(陶邑TK47並行)の窯であり、段丘斜面に3基の窯が並んで検出されている。埴輪は三河系埴輪と呼ばれるタテ板ナデ調整が顕著な円筒埴輪を主体とし、石見型埴輪も含まれており、伊勢地域との関わりが想定される。

古代以降

古代の遺跡は、市道遺跡(28)が規模も大きく、この他に大海津遺跡などがある。市道遺跡は北側の掘立柱建物群と南側の塀と溝で囲まれた区画に分けられる。北側では正六角形の掘立柱建物が3棟発見されたほか、総柱建物群が北辺と西辺に並び、その内側には側柱建物や間仕切りのある建物が配列するといった建物構成をとっており、首長居館、あるいは郡衙や郡倉などの公的施設と推定されている。一方南側区画は寺院遺構(市道廃寺)と考えられ、建て替えを示す2重の区画が存在し、内部には金堂、講堂、僧坊跡が検出された。遺物として須恵器の金属製仏器模倣品、「寺」墨書須恵器、瓦塔、仏像の螺髪、多量の瓦が出土している。また、市道1～3号窯は補修瓦を焼成したロストル式平窯である。

中世の遺跡は、公文遺跡(32)や若宮遺跡(27)、王郷遺跡(35)のほか広域で確認されている。集落の跡や地下式坑が検出されている。公文遺跡は中世前期の豪族居館を中心とした集落跡と考えられる。幅約4m、深さ約1.6mのV字状の大溝が発見され、ここからは多量の山茶碗のほか、馬・牛などの獣骨が出土している。また領主の塚墓と思われる遺構も隣接して検出された。中世後期の城館址では牟呂城址(40)があり、方形に巡ると考えられる土塁と堀が確認されている。

中世末期～近世には、現集落のまとまりが形成された。市場遺跡(34)では、近世の寺院跡と考えられる建物跡が検出されている。



- | | | | | |
|--------------|--------------|-------------|-----------|------------|
| 1. 石塚貝塚 | 9. 王ヶ崎貝塚 | 17. 東脇古墳 | 25. 大西遺跡 | 33. 市道西遺跡 |
| 2. 坂津寺貝塚 | 10. 小浜貝塚 | 18. 権現神社古墳 | 26. 水神古塚 | 34. 市場遺跡 |
| 3. 内田貝塚 | 11. 横倉遺跡 | 19. 牟呂王塚古墳 | 27. 若宮遺跡 | 35. 王郷遺跡 |
| 4. 水神貝塚 (第1) | 12. 見丁塚遺跡 | 20. 市杵嶋神社古墳 | 28. 市道遺跡 | 36. 吉田城址 |
| 5. 水神貝塚 (第2) | 13. 境松遺跡 | 21. 磯辺王塚古墳 | 29. 百北遺跡 | 37. 喜見寺野址 |
| 6. 大西貝塚 | 14. 三ツ山古墳 | 22. 万福寺古墳 | 30. 羽根井遺跡 | 38. 清源寺野址 |
| 7. さんまい貝塚 | 15. 三ツ山古墳群 | 23. 王ヶ崎1号墳 | 31. 築根遺跡 | 39. 羽田村古城址 |
| 8. 市杵嶋神社貝塚 | 16. 牟呂八幡神社古墳 | 24. 大海津遺跡 | 32. 公文遺跡 | 40. 牟呂城址 |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過（第3図）

豊橋市西部の牟呂町中心部を対象とする土地区画整理は、昭和54年度に事業決定が成され、昭和57年度より本格的に牟呂土地区画整理事業として工事が実施されている。これは牟呂町の住宅密集地の整理を意図したもので、平成9年度まで継続して行われた。かつては半農半漁を主な生業とし、木造家屋の間を狭い道路が巡る複雑な町並みであったこの地域も、近年は直線的に整備された閑静な街路が広がり、昔日の面影は失われている。牟呂地区は遺跡の集中地域であり、市教育委員会では区画整理事業の進捗に合わせて長期に渡る発掘調査を実施した。

今回発掘調査を行った若宮遺跡・内田古窯・内田貝塚のある牟呂坂津地区は、JR豊橋駅より西へ約2キロの中心部と臨海部とを結ぶ軸線上にあり、牟呂土地区画整理事業により整備された市街地の北側に隣接する地区である。現在は牟呂用水によって画されているが、牟呂地区とは同一の段丘上にあり、一連の地域として歩んできた歴史的経緯がある。

この牟呂坂津地区において、市役所区画整理課により、平成13年度～平成27年度にかけて21.22haに及ぶ土地区画整理事業が計画・実施されている（豊橋牟呂坂津土地区画整理事業）。事業に先立ち、市教育委員会では平成11年度に国庫補助事業で事業地内を対象にした遺跡の範囲確認調査を実施し、その範囲を確定させ、性格のデータ収集に努めている。

若宮遺跡・内田古窯・内田貝塚の発掘調査は、豊橋牟呂坂津土地区画整理事業に伴う初の本調査である。事業地内にはこの他に坂津寺貝塚、境松遺跡、三ツ山古墳などの遺跡が存在している。今回の発掘調査は段丘崖を削平して、宅地及び道路造成を行う部分の調査である。調査面積は3,500㎡で、調査期間は平成18年5月9日～平成19年3月30日である。

貝塚部分のうち、市道の南側にある600㎡については、当初の調査計画面積を超えたため、19年度調査とした。ただし、表土剥ぎのみは作業の効率性を考えて、18年度調査と同時にやっている。発掘調査は調査地区を3分割し、連続して行ったが、段丘斜面から当初想定していなかった埴輪窯である内田古窯が検出されたため、調査期間は予定を越えて年度末まで延びる結果となった。

2. 調査の経過と方法

発掘調査は、基本的に切土によって遺跡を破壊する部分を対象としており、道路部分及び宅地造成地に相当する。調査面積は若宮遺跡・内田古窯・内田貝塚を合わせて3,500㎡である。調査区の設定については、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、この国土座標に合わせて若宮遺跡の南西隅を起点にして、10mグリッドを設定した。この起点より西から東にA～Z、南から北に1～10というように名付け、その交点を地区名としている。ただし、貝塚部分については、10mグリッドでは精度が粗くなるため、1mグリッドを設定して、新たに地区割りをした。地区割については、貝塚部分で詳述する。

発掘調査の手順は表土を重機で掘削し、後は人力で掘り下げた。具体的な作業順序は以下のとおりである。

若宮遺跡

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
3. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成し、出土状況写真を撮影する。
4. 調査区内の遺構を完掘し、個別遺構写真を撮影する。
5. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影し、航空測量による遺構全体図を作成する。

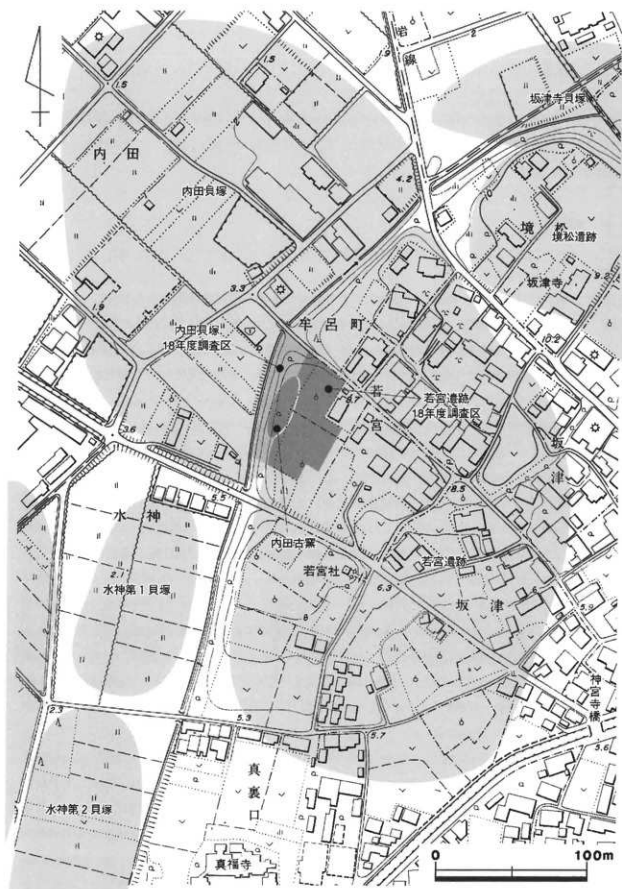
内田古窯

1. 重機を使用して調査区内の表土剥ぎを行う。
2. 試掘トレンチを入れ、古窯断面図を作成する。
3. 窯体内を掘削して、分層発掘して遺物を取り上げ、出土状況図などを作成する。
4. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成し、出土状況写真を撮影する。
5. 調査区内の遺構を完掘し、遺構全体図を完成させる。
6. ラジコンヘリを用いて調査区の全体写真を撮影する。

調査を進める中で、成果を市民に報告すべく、平成18年10月28日と平成19年2月18日に、内田貝塚と合わせて現地説明会を実施した。新聞報道などによる市民の関心も高く、前者で160名、後者で200名の市民の参加があった。また、内田古窯は調査例の希少な埴輪窯であることもあり、調査中に多くの研究者の来訪を受け、さまざまな指導や教示をいただいた。



現地説明会の風景（若宮遺跡と内田1～3号窯）



第3図 調査区位置図 (1/2,500)

第3章 若宮遺跡

1. 遺構 (第4～18図)

今回の調査では、古墳時代後期から近世に至る遺構群を確認した。古墳時代の遺構には竪穴住居、掘立柱建物、集石遺構が、古代の遺構には土塋が、戦国期の遺構には溝、土塋が、近世の遺構には掘立柱建物、溝、井戸、土塋、整地層等がある。

A. 建物

SB050 (第5・6図)

調査区東南部 (K・L18・19区) で検出した竪穴住居である。平面形は隅丸方形を呈し、主軸方位はN-5°-Eを指す。規模は一辺6.0mである。遺構の大半はSD002・006、SB015等の後世の遺構群により削平されている。また、南東端部のコーナーは調査区外になる。

遺構の遺存状況は概して良好ではない。竪穴部分は削平され、埋土ほとんどは残存していなかった。床面で、主柱穴が4カ所、ビット2基、竈、周壁溝を検出した。主柱穴4カ所 (SX054・056a・056b・059) は住居の壁面に平行する形で配置されている。柱間は北・南側は3.75m、西・東側は3.90mで、東西方向のほうが15cm長い。柱穴の形状はほぼ平面円形、断面逆台形を呈する。柱穴の規模は径0.27～0.56m、深さ0.27～0.56mを測る。柱穴の埋土は、SX054最上層、059中位のみ断面観察によれば暗灰色を基調とし、ブロック土や小礫が混在する。またSX057は、主柱穴SX056aに切られるようにして検出されている。一部しか遺存しないため詳細は不明だが、深さは最深部で0.08mと非常に浅く、堆積埋土は一層である。この上面で、須恵器の坏蓋が逆位の状態で出土し、炭化物も近接して出土している。以上のほかに、床面でSX053・058の2基のビットが検出されている。いずれも主柱穴SX056a及びbの外側にあたる住居の北側コーナー部に位置している。SX053は平面形は不整な円形を呈し、長さ0.53m、深さ0.27mを測る。断面形状は逆台形を呈する。堆積埋土は3層より構成されており、このうち中間層は暗灰色土を基調とし、最上層には主柱穴SX054の埋土に近似したブロック土が混在している。SX058は平面楕円形、断面は底面が丸味を帯びた逆台形を呈する。規模は長さ0.96m、深さ0.24mを測り、埋土は2層からなる。なお、埋土の上層には住居に伴う竈 (SX062) のものと近似した焼土の粒子が多く認められた。

SB050に伴う竈 (SX062) は、北壁面のほぼ中央部で検出した。規模は長軸2.6m、短軸0.90mを測り、東西方向に長い形状を呈する。遺存する深さは0.20mで埋土は3層から構成される。なお、埋土の上面に土師器の甕、及び焼土塊が存在し、最下層には灰溜まりが認められた。焼土塊は、竈の中央部では後世の遺構SD066により削平され確認出来なかったが、西・東側はよく遺存している。

以上のほかに、住居床面で確認した遺構には周壁溝 (SX061) がある。周壁溝は上面最大幅0.3m、下面最大幅0.24m、上面最小幅0.09m、下面最小幅0.05mを測り、住居北東、及び南西部は一部検出されていない。断面形状は逆台形を呈し、深さは最深部で約0.10mを測る。埋土は暗灰色粘質土の一層

である。

出土遺物には、竈から出土した土師器の甕、SX057の上面で出土した須恵器の坏蓋などがある。須恵器の年代は6世紀中葉～後葉で、土師器の甕も口縁部及び胴部の形態等より、須恵器とはほぼ同時期と考えて差し支えない。したがって、SB050の帰属時期は6世紀中葉～後葉である。

SB055（第7・8図）

調査区南部（J・K19区）で検出した堅穴住居である。平面形状は一辺が4.10mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-10°-Wである。遺構の大半はSD002・006、SB015等により切られている。また住居の東南側コーナー部分はSD001に切られ残存していない。住居は最深部で0.12m残存しており、埋土は暗灰色を基調とし地山のブロック土を含む。床面では、主柱穴4カ所、土壌、ピット、竈、周壁溝を検出した。

主柱穴（SX043・046・047・048）は壁面コーナー近くにある。柱間は南北2.35m、東西2.20mである。主柱穴は平面円形、断面方形、もしくは逆台形を呈する。柱穴の規模は径0.39～0.57m、深さは0.39～0.60mを測る。埋土暗灰色を基調とし、地山ブロックや焼土粒が混在する。このうちSX043・047は、人為的に埋め戻した後にこの再度掘り返した状況が看取出来る。

このほか、住居床面で検出された遺構として土壌（SX049・SX148）がある。SX049は床面のほぼ中央部で検出した。形状は平面が不整な隅丸方形、断面は皿形を呈し、埋土は淡灰色土の単一層である。規模は長さ2.30m、深さ0.03mを測る。SX148は住居の北東コーナーにあり、主柱穴SX046に隣接する。平面楕円形、断面逆台形を呈し、規模は長さ0.86m、幅0.54m、深さ0.27mを測る。埋土の堆積状況から人為的に埋め戻されたことが分かる。

竈（SX062）は北壁のやや東寄りで見出した。煙道部と考えられる遺構が北に0.70mほど延びており、住居内からの長さは1.60mを測る。南北方向に長く延びた形状で、煙道部は深さ0.06mである。埋土は、暗灰色軟質土の単一層である。竈の最下層には厚さ3cmほどの浅い灰溜りの埋土が認められる。なお、この灰溜りの下面と煙道部下面との比高差は0.07mを有する。なお、竈は意図的に破壊され、東西2.55mの範囲にわたって焼土の広がりが認められた。

周壁溝（SX052）は壁面沿いを全周せず竈に隣接する地点で途切れる。規模は、上面最大幅0.24m、下面最大幅0.15mでいずれもほぼ均一な規模である。断面形状は逆台形を呈し、埋土は淡灰色粘質土の単一層である。

竈が破壊された焼土の分布内で、土師器の甕、須恵器の坏身、礫が出土している。須恵器の時期から、SB055の帰属時期は6世紀後葉～末葉といえよう。

SB060（第9図）

調査区南側のほぼ中央部（I・J17・18区）で検出した堅穴住居である。平面形状は一辺7.0mの隅丸方形を呈し、主軸方位はN-5°-Wを指す。遺構の大半はSD002・006、SB015等により切られている。遺構の北西側コーナーはSD035・045に切られ残存していないが、その他は比較的良好に遺存している。深さは0.12mで、埋土は暗灰色土を基調とし地山ブロックを含む。床面では、主柱穴が4カ所、ピッ

ト2基、及び土壌、竈、周壁溝を検出した。

主柱穴（SX071～074）のうち、SX071は上部が削平され推測の域を出ないが、その他はコーナー近くに均等に配列する。柱の間隔は、南北で4.10～4.40m、東西で4.20mを測る。柱穴の形状は平面円形、断面はSX071のみ逆三角形、他は逆台形を呈する。柱穴の規模は径0.36～0.78m、深さ0.36～0.46mを測る。なお、埋土は暗灰色を基調とした3層の堆積土により構成され、上層は微小の褐色粒、中層は暗茶黄色ブロック、下層はキメの粗い粘質土を含んでいる。また、SX073、074は、下部で柱痕跡が認められた。柱痕跡は、計約0.15mの規模を有し、柱穴の下部まで続いている。埋土は暗灰色を基調とし、暗茶黄色ブロックを多く含む。

このほか、ピット（SX075）、土壌（SX080）がある。SX075は住居床面の南端中央で検出した。平面形状は上面径0.86m、下面径0.38mを測る円形である。断面形状は、上部が深さ0.12mの皿状を呈し、下部は深さ0.34mの逆台形を呈する。埋土は暗灰色を基調とし、上部は微小の褐色粒を多く含み、下層は粘質を伴う。SX080は住居床面の中央部よりやや東側で検出した。形状は平面が不整な楕円形、断面皿形を呈し、深さは0.02mと極めて浅く、詳細については不明である。このほか、住居北東コーナーの内側、主柱穴SX072の外側で貯蔵穴と考えられる土壌を検出した。この土壌は、径0.96mの平面円形を呈し、深さは0.18mで断面楕円形を呈する。

竈（SX067）は住居の北壁中央で検出した。その北側部分が北壁より0.40mほど突出しており、規模は東西で1.90mを測る。平面形は南端部がやや窄まる隅丸方形を呈し、断面は深さ0.12mの浅い皿形を呈する。埋土は2層からなり、上層は焼土である。下層は暗茶灰色粘質土である。

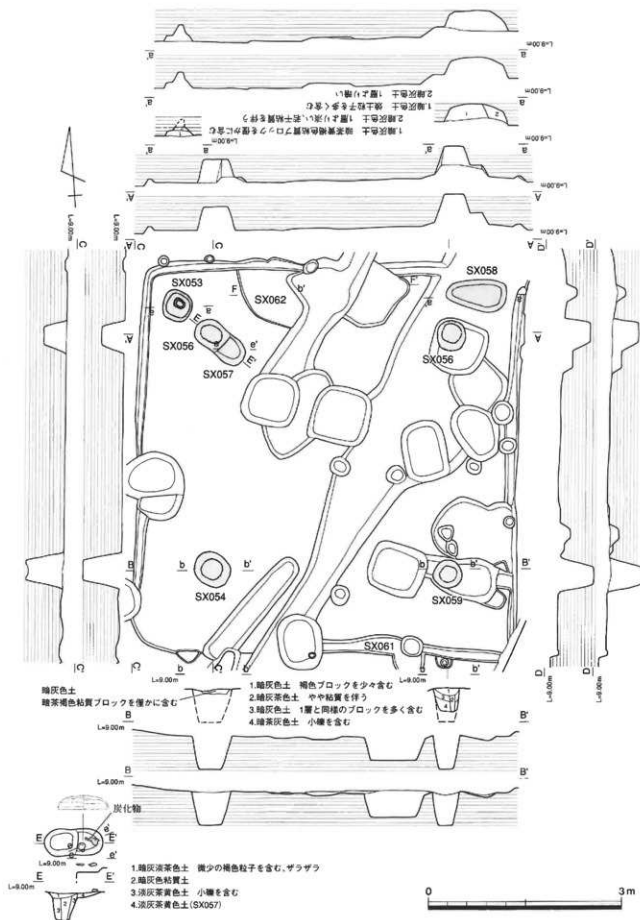
周壁溝（SX069）は住居の壁面沿いに認められるが、全周せず竈の東側で途切れている。規模は、上面最大幅0.30m、下面最大幅0.16mを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は淡灰色土の単一層である。SB060からは、土師器の甕・瓶、須恵器の坏蓋・高坏・鉢、礫が出土した。須恵器の鉢はSB060の検出面、土師器の甕と須恵器の坏蓋・高坏は住居の埋土、土師器の甕、礫石が竈から出土しており、床面直上の遺物は確認していない。帰属時期は、坏蓋が7世紀、高坏が7世紀後葉に比定され、SB060は7世紀後葉以前に廃棄されたと想定出来る。

SB090（第10図）

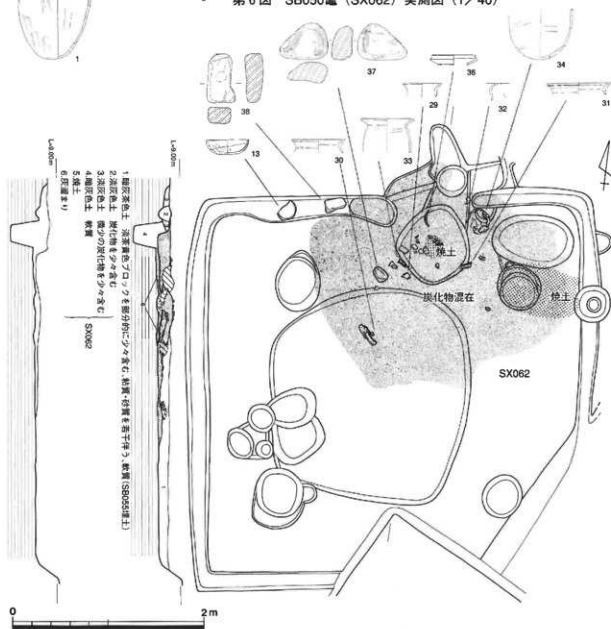
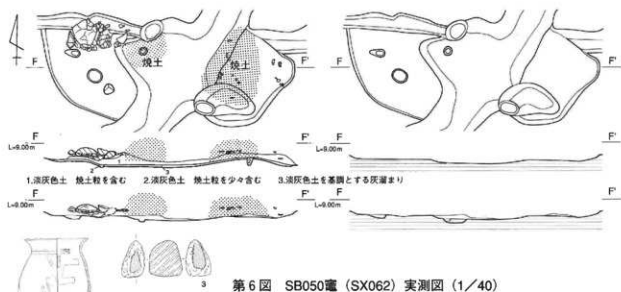
調査区中央部の東側（J・K17区）で検出した堅穴住居と思われる遺構である。北東側はSD107等に切れ残存していない。平面形状は一辺が4.50mの方形を呈すると思われる、主軸方位はN-5°-Wである。床面で、主柱穴と考えられる柱穴4ヵ所を確認した。柱穴は平面円形、断面逆台形を呈し、深さは最も良好なもので約0.30mを有する。なお、竈や周壁溝に相当する部分は確認されず、遺物も出土していない。帰属時期は住居の形態、その他住居との関係から、古墳時代後期であろう。

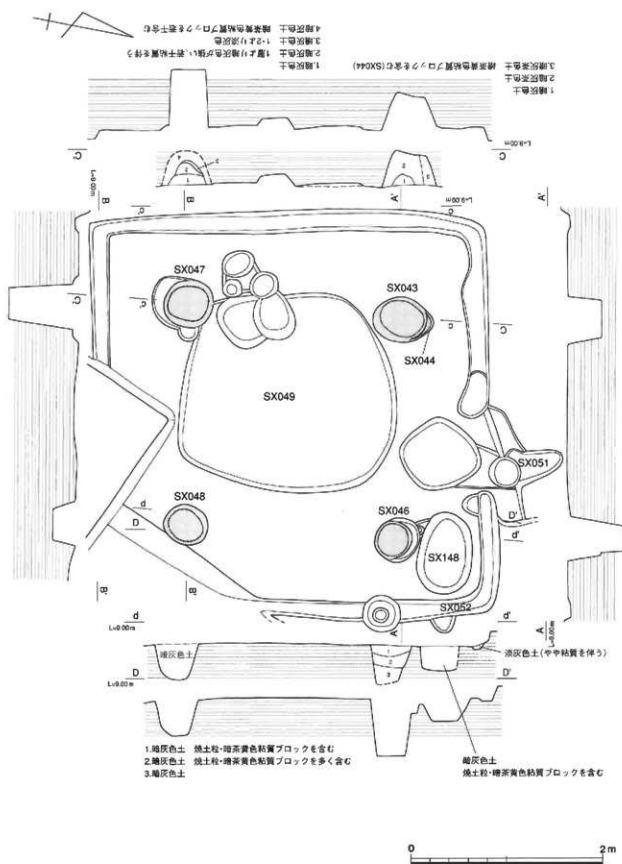
SB147-I（第11図）

調査区中央部の西側、台地の端部（I15・16区）で検出した堅穴住居と思われる遺構である。大半はSD109等により切られ、西・南側は残存していない。平面形状は残存部で一辺が3.70mの方形を呈すると思われる、主軸方位はN-15°-Wを指す。床面で、主柱穴と考えられる柱穴4ヵ所を確認した。

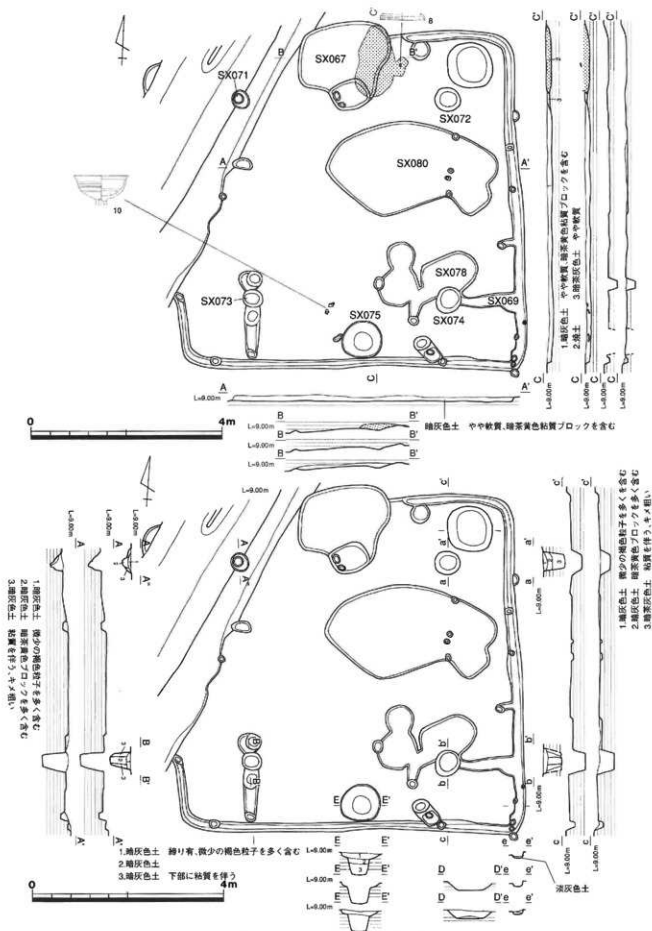


第5図 SB050実測図 (1/60)

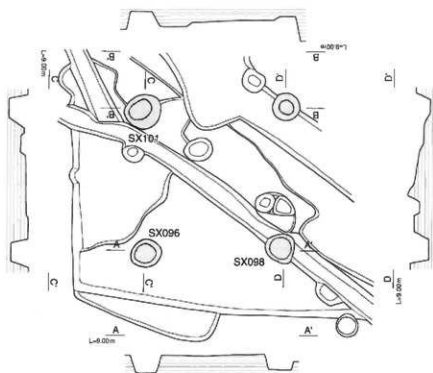




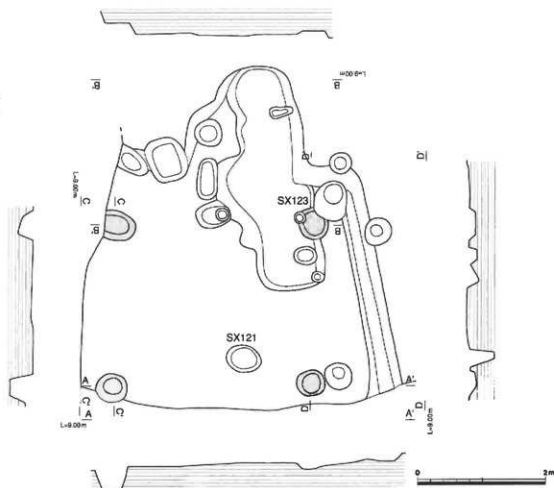
第8図 SB055実測図-2 (1/40)



第9図 SB060実測図 (1/40)



第10図 SB090実測図 (1/60)



第11図 SB147実測図-1 (1/60)

規模は径0.45～0.48mの平面ほぼ円形、深さは最も深いもので0.42mの断面逆台形を呈する。なお、竈、及び周壁溝に相当すると思われる部分を確認した。竈に相当すると思われる部分は、北壁より北にやや突出する部分（煙道部か）を設け、規模は、最大幅1.95m、長さ1.50mを測る。周壁溝に相当すると思われる部分は、壁面が比較的良好に遺存している東辺沿いで検出した。残存部での検出面の最大幅は0.42m、底面0.18mで、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物には須恵器の坏身と蓋があり、遺構の埋土上部で出土した。7世紀後葉に比定されるものである。従って、SB147-Iは7世紀後葉以前に廃棄されたと想定される。

SB147-II（第12図）

調査区中央部の西側、台地端部（I15・16区）で検出した総柱建物である。規模は残存部で桁行5.1m、梁間3.45mの2間四方と思われる。柱間は、桁行で2.55m、梁間1.65～1.95mを測る。柱穴は、径0.42～0.60mのほぼ円形、深さは最も深いもので0.44mの断面逆台形を呈する。主軸方位はN-15°-Wである。

SB147-IIに伴う遺物は出土しておらず、帰属時期は明らかにできない。ただし、切り合い関係からSB147-Iよりも新しいのは明確である。

SB015（第13図）

調査区東南部（K・L19地区）で検出した4間×3間の側柱建物である。柱穴の一部はSD002・006に切られている。主軸方位はN-20°-Eで、規模は桁行7.50m、梁間4.05mである。桁行の柱間は1.80mであるが、梁間の柱穴数、柱間、及び柱穴の位置にはばらつきが認められる。北側梁間は柱穴が4カ所で、内側に位置する2本の柱間は狭まっている。一方、南側梁間の柱穴数は3カ所で、中央に位置する柱穴はやや西側に配置されている。

各柱穴の平面形状は隅丸方形、あるいは隅丸長方形、及び不整形円形を呈する。規模は隅丸方形を呈するもので一辺0.60～0.98m、不整形円形を呈するもので長さ0.69～1.05mを有する。柱穴の深さは、桁行で遺構検出面より0.36～0.63m、梁間は0.11～0.21mと浅い。なお、各柱穴の埋土は灰、もしくは茶色を基調とし、地山ブロック土を含むものも認められる。

出土遺物として、柱穴SX024より7世紀代の須恵器の坏の小片が1点出土したのみである。しかし、方形の柱穴が多く認められることから、建物の帰属時期は7世紀代と考える。

SB220-1（第14・15図）

調査区北東部（J～L13・14区）で検出した掘立柱建物である。2・3間×5間以上の建物で、西側にはSB220-2が併存する。建物は、調査区外となる北側にさらに延びる可能性がある。主軸方位はN-17°-Eである。規模は桁行9.00m、梁間4.80mを測る。柱穴数は、桁行で5カ所、梁間は北側が4カ所、南側が3カ所である。また建物の内部にも柱穴列が存在し、建物を横断、もしくは一部を囲うかたちで間仕切りが存在したと考えられる。柱間は、桁行西側で1.80m、東側で1.20・1.80mである。また梁間は北側で1.60m、南側で2.40mを測る。柱穴は、平面は径0.50～0.80mの円形を呈し、深さ0.10

～0.95mで、断面形は逆台形を呈する。また西側の柱穴列については、SD223に切られ、一部が失われているほか、北半部に位置する柱穴は削平を受けて遺存状況は良くない。ちなみにこの削平は、後世の造成に伴うものと考えられ、調査区の北辺から東辺付近、さらに台地斜面に至る広範囲に及び、削平された深さは0.60mである。

また、建物の南東隅で土壌SX204を確認した。形状は平面隅丸方形を呈すると思われ、断面は皿形を呈する。規模は、幅1.50m、深さ0.10mを測る浅い土壌である。SX204の周縁には、これを圍繞する柱穴が認められ、間仕切りとなっている。

出土遺物として、SX204から非ロクロの上師器皿の完存品1点と破片資料、17世紀後葉に比定される瀬戸美濃窯産の鉄軸丸碗、17世紀中葉～後葉の鉄絵鉢がある。また、柱穴のうちSX209からは瀬戸美濃窯産の灰釉型打皿が、SX214からは非ロクロ成形の土師器皿が出土している。

SB-220-1の帰属時期は、出土遺物から17世紀後葉以降と考えられる。掘立柱建物内の堅穴は、牛馬の納屋として利用される場合が多く、SX204もその可能性が高い。この場合、建物の一角を納屋として利用したと思われる。

SB220-2 (第14図)

調査区北東部(J-113・14区)で検出した掘立柱建物である。4間×4間で構成され、規模は桁行7.40m、梁間6.40mを測る。主軸方位はN-17°-Eである。柱穴は、平面形が径0.50～0.80mの円形を呈し、深さ0.10～0.95mの断面逆台形を呈する。東側梁間は柱穴が1ヵ所検出されなかった。柱間は、桁行が1.80・2.00m、梁間が1.20m・1.40m・1.80mである。

出土遺物は、SX221とSX224で確認した。SX221からは寛永通寶が一点、SX224からは瀬戸美濃窯産陶器の鉄軸丸碗の破片が出土している。位置関係からSB220-1と同時期の建物と考えられ、遺物の内容も矛盾はない。

B. 土壌

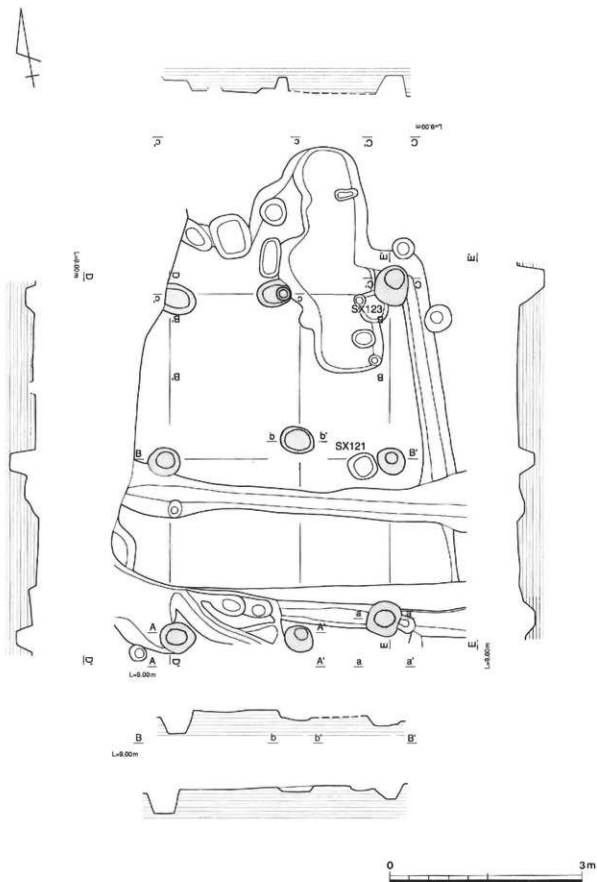
SX065 (第16図)

調査区中央部の西側、台地端部(I16・17区)で検出した土壌である。遺構の大半は他の遺構と重複し、残存状況はあまりよくない。現存部から推定すると、平面形状がほぼ円形に近く、断面形状は浅い皿形を呈し、深さは検出面より0.36mである。埋土は暗灰色土を基調とし、これに淡茶黄色の粘質ブロック、暗茶赤褐色の粒子、及び炭化物を含む。底面は平坦ではなく、拳大前後の凹みがいくつか存在する。

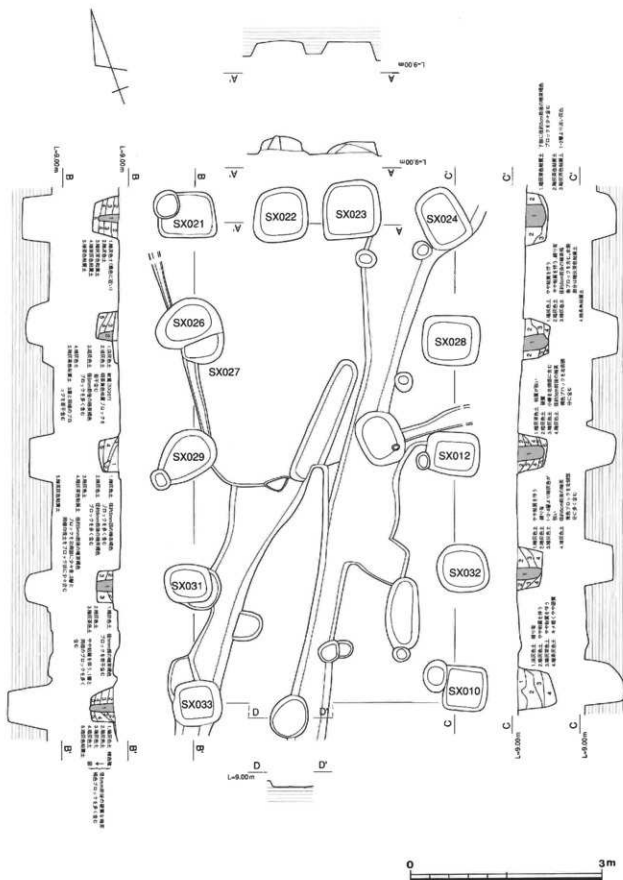
出土遺物には、土師器の甕、甔、須恵器坏、石鏃がある。遺存状況は概して良好ではないものの、SX065の帰属時期は古墳時代後期と考えられる。

SX036 (第16図)

調査区中央部の西側、台地端部(I16・17区)で検出した土壌である。北側は先述したSX065と重



第12図 SB147実測図-2 (1/60)



第13図 SB015実測図 (1/60)

複するが、その先後関係は確認できていない。また、西側は後世の溝状遺構に切られ残存しない。現存部から推定すると、平面形状がほぼ円形、若しくは楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈すると思われる。深さは最も深いところで0.42mを測り、遺構の南側は深さ0.09mと浅い。埋土の状況はSX065と酷似しているが、粒子や炭化物は含まれない。底面は平坦ではなく、拳大前後の凹みが多数存在する。

SX036からは遺物が出土しておらず、時期の比定は難しい。ただし、SX065との位置関係や、酷似した埋土の状況から、古墳時代後期（以降）と考えられる。

SX005（第16図）

調査区の南東端部（K20区）で検出した土壌である。南・東側は調査区外となっており、その正確な形状は不明である。規模は現存部で北辺2.00m、西辺0.90m、深さ0.05mを測る。埋土は暗灰色土の単一層である。

出土遺物には、土師器の小片、灰釉陶器の碗の口縁部片が出土しており、SX005の帰属時期は古代以降と思われる。

SX038（第16図）

調査区南端のほぼ中央（J19・20区）で検出した土壌である。大半はSX040に切られ遺存していない。また、南側は調査区外となる。規模は現状で南北2.85m、東西1.90m、深さは検出面から0.45mを測る。断面形状は浅い楕円形を呈する。埋土は暗灰茶色土で、やや粘質を帯びた焼土ブロックを含む。出土遺物には、土師器の壺の口縁部から胴部上半の破片がある。

なお、SX038底面で、ピットを2基確認した（SX063・064）。SX063・064は重複し、SX063が064よりも新しい。SX063は平面円形、断面逆台形を呈する。規模は径0.75m、深さ0.27mを測る。SX064は平面円形もしくは楕円形、断面逆台形を呈する。規模は残存部最大幅0.51m、深さ0.17mを測る。埋土はSX063・064の双方とも暗灰色土である。出土遺物には、SX063から土師器の小片が多数、064から須恵器の長頸壺の口縁部片が出土しており、いずれも7世紀後葉に比定されるものである。

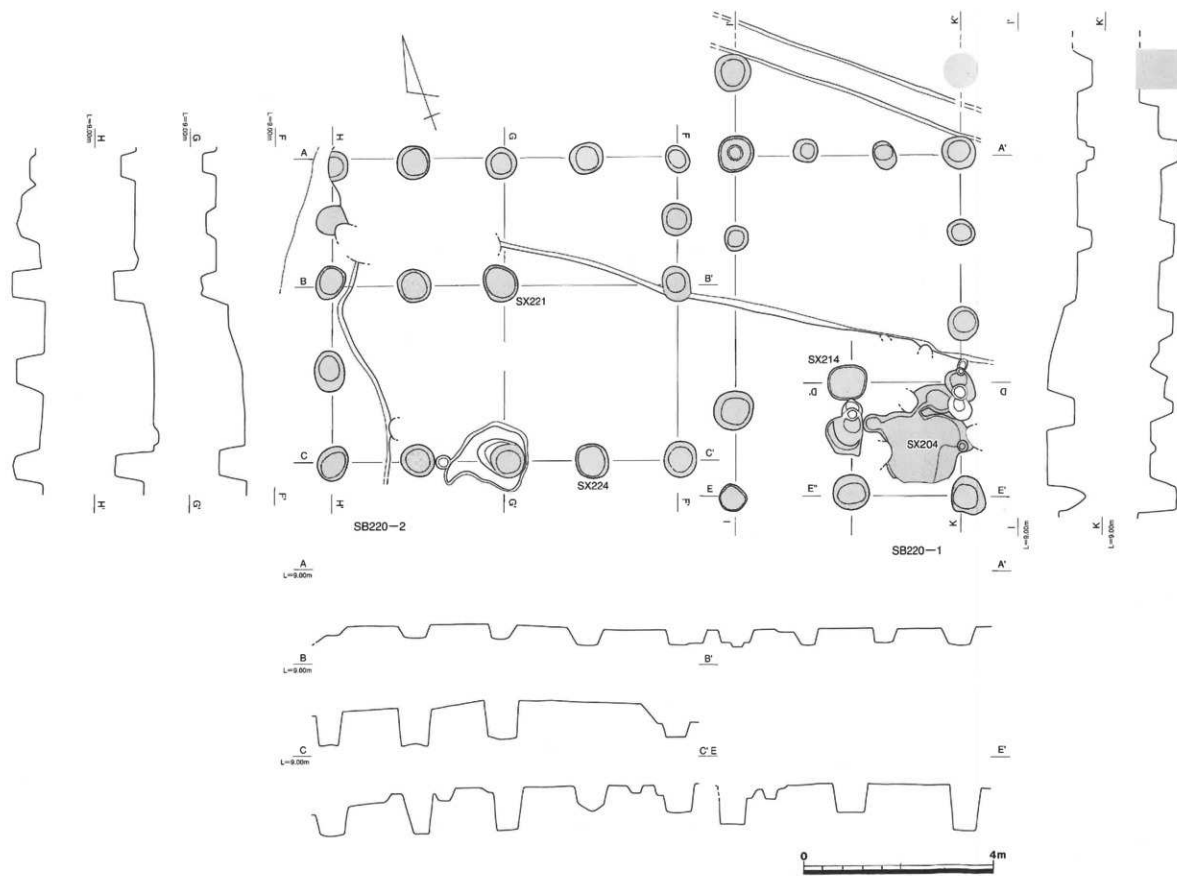
以上から、SX038の帰属時期は7世紀後葉と考えられる。

SX146（第16図）

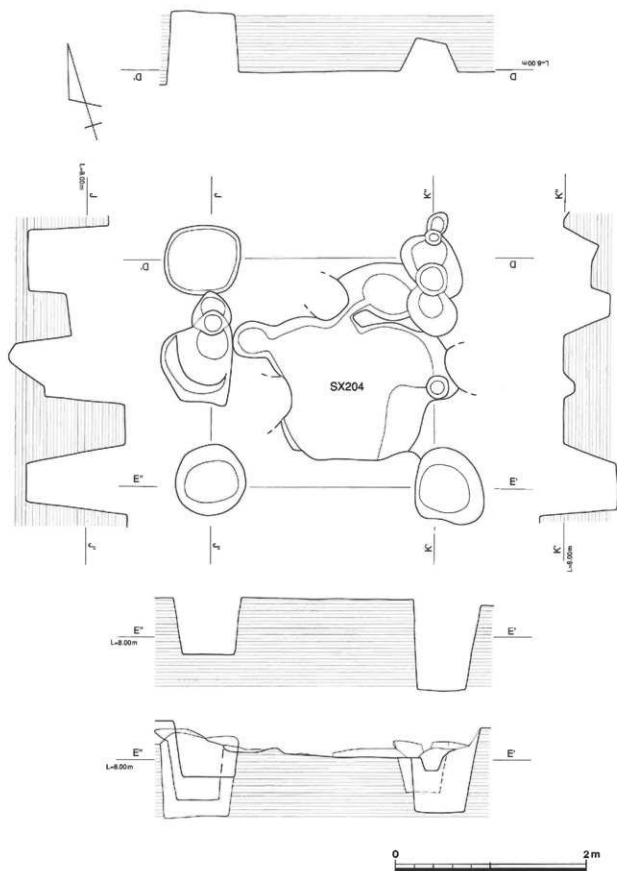
調査区の南西部（I18地区）で検出した土壌である。西側が後世の溝状遺構に切られ残存していないため、詳細は不明である。規模は、現存部で南北2.40m、東西2.25m、深さ0.30mを測る。埋土はやや硬質な灰色土である。出土遺物には灰釉陶器の碗の口縁部から体部片、同短頸壺の肩部片が出土しており、帰属時期は古代以降と考えられる。

C. その他の遺構

SX040・070（第17図）



第14图 SB220・SX204实测图 (1/40)



第15図 SB220・SX204実測図-2 (1/40)

調査区南端部の西側（I・J19・20区）で検出した遺構である。埋土の違いから2ヵ所の連続する遺構と想定したが、これに囲まれた内部は平面形が方形を呈した遺構となる。ただし、内部からはその性格を特定できるような遺構は検出されていない。SX040の南側は調査区外となり、SX070の西側は溝状遺構等に切れ残存しない。

SX040の規模は、現存部で長さ8.00m、幅3.2m、深さ0.56mを測る。一方SX070の規模は長さ14.4m、幅4.00mを測るが、長さ10.2m、幅3.2mの範囲で大きく掘り直した痕跡が認められた。そして、逆L字形を呈した一連の遺構になったと考えられる。SX040の埋土は、上下2層に分けられる。上層は暗灰色土、下層は暗灰茶黄色粘質土であり、これに茶黄色粘質ブロックを部分的に含む。

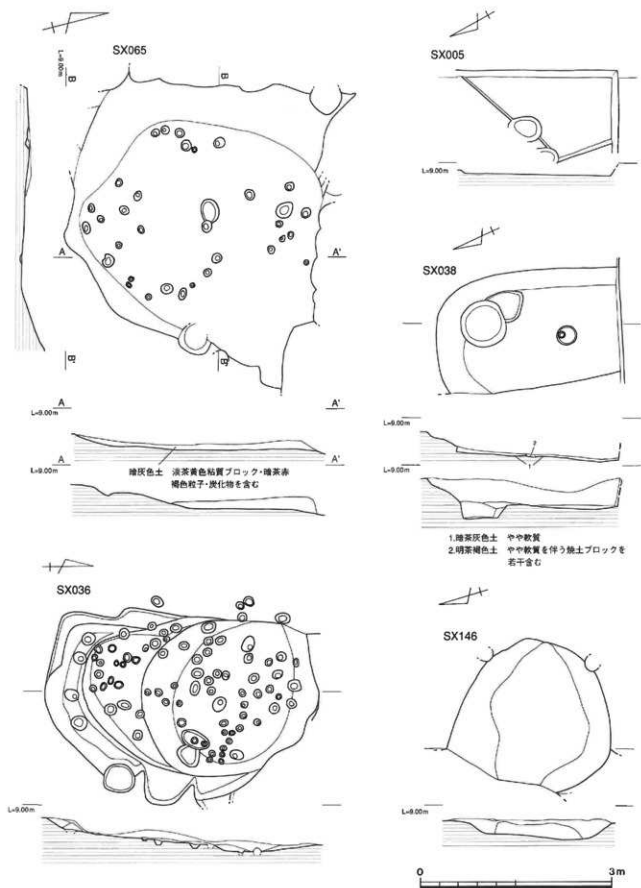
出土遺物のうち、SX070との重複関係が判明するまでの埋土から出土したものをSX40上層出土としたが、SX070の遺物も含まれる可能性が高い。SX040上層の出土遺物には、土師器の鍋、清郷型鍋、須恵器の甕、同長頸壺、灰釉陶器、緑釉陶器がある。このうち、灰釉陶器の出土量が最も多い。緑釉陶器は実測図を掲載した小破片1点のみの出土である。このほかSX040の出土遺物として、土師器の甕、清郷型鍋、須恵器の坏蓋、同碗、灰釉陶器、土錘、石錘、礫石がある。灰釉陶器はSX040上層出土遺物とほぼ同様である。

SX040とSX070は、埋土の違いから連続する別の遺構と把握したが、混入品を除いて出土遺物に明らかな時期差を想定することはできず、ほぼ同時に存在した遺構の可能性が高い。掘り直しがされるなど一定期間にわたる利用が想定され、両遺構に囲まれた内部の性格が重要と思われるのだが、現時点ではそれを特定することはできない。

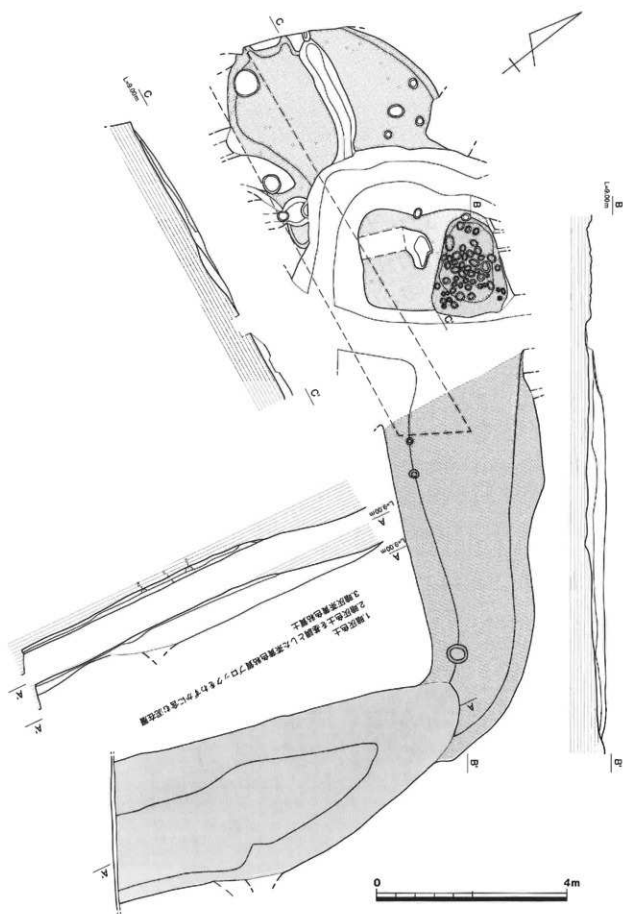
SX247（第18図）

調査区北端の中央（J・K12・13、J14区）で検出した溝状の遺構で、台地斜面に併行して延び、遺構の南端は窄まりながら収束する。底は北に向け緩やかな下り傾斜を成している。また、遺構の北側は調査区外に延びている。規模は、検出長19.8m、幅2.00mを測り、主軸方位はN-5°-Eである。埋土は硬質に締まる淡灰色土である。

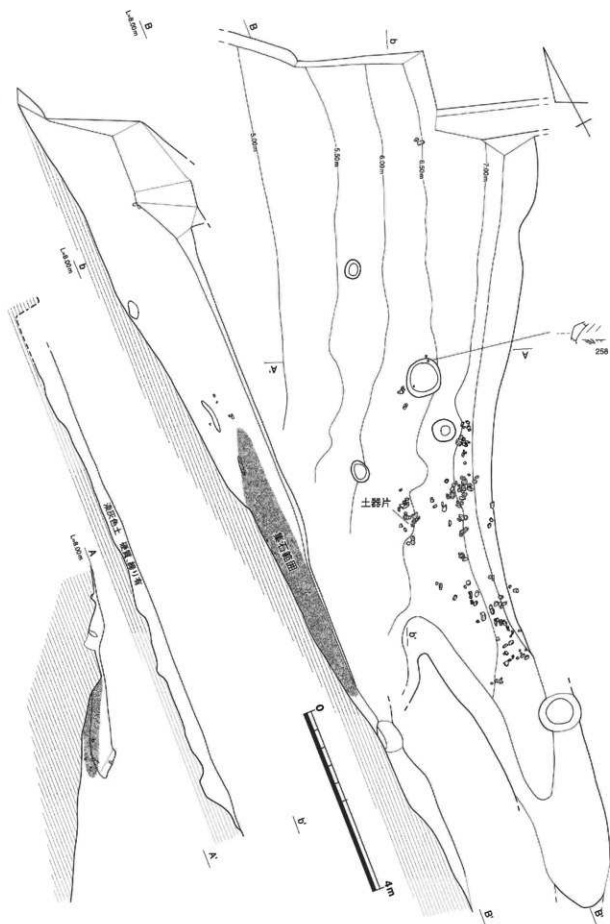
出土遺物として、被熱した礫を含む集石に伴い、土師器の甕の口縁部小片が認められる。従って、SX247帰属時期については不確定要素を含むが、甕の形態から古墳時代後期以降と考える。



第16図 SX005・036・038・065・146実測図 (1/60)



第17図 SX040・070実測図 (1/80)



第18図 SX247実測図 (1/80)

2. 遺物 (第19～26図)

出土遺物は、弥生土器、須恵器、灰釉陶器、山茶碗、土師器、陶磁器、石器、瓦、土製品、銭貨など多岐にわたり、遺物の時期は古墳時代後期～終末期、平安時代、近世におもに集中している。遺物の総量は収納用コンテナ (34×54×20cm) 15箱分である。以下では、性格ごとに遺構をまとめ、その出土遺物を説明する。

A. 建物

SB050 (1～3)

1は土師器の甕である。いわゆる長胴甕で、残存状態は良好である。調整は口縁部ヨコナデ、体部は外面がケズリに近い板ナデである。2は須恵器の坏蓋である。湖西窯産で、天井部と口縁部との境界の稜は失われているが、比較的径が大きなことからⅢ期中～後段階に比定され、陶邑編年のTK43～TK209並行期に該当する。3は礫で2面が被熱しており、甕の台石に使用したものと考える。

SB060 (4～12)

4～7は土師器である。4～6は甕の口縁部で、いずれも内外面はヨコナデ調整される。7は甕で、口縁部付近はわずかに内湾するが、全形はほぼ逆台形を呈すると思われる。外面にはハケメが密に施されている。8・10・11は須恵器である。8は坏蓋で、やや径が大きく湖西窯のⅢ期中～後段階に比定される。10は無蓋高坏で、坏部外面に連続する櫛条工具の刺突が見られ、脚部はスカシを持つが数は明らかにできない。湖西窯のⅢ期後～末段階に比定され、陶邑編年のTK209並行期に該当する。11は湖西窯産の大型鉢である。機種としては珍しく、帰属時期は不明である。9は灰釉陶器の中碗で、混入品だろう。12は礫で、被熱している。砥石の可能性がある。

SB015 (13)

13は須恵器の坏身の底部片である。湖西窯産で径が小さく、Ⅲ期後～末段階に比定される。

SB020 (14)

14は灰釉陶器の碗である。H-72号窯式以降に比定される。

SB055 (29～38)

29～35は土師器である。29～34は甕で、いずれも長胴甕であろう。29は法量が小さく、小型の壺形を呈するかもしれない。35は碗形の坏である。口縁部は内湾し、端部はわずかに尖る。全体に摩滅が著しいが、調整は内外面ともナデ・ユビオサエで、粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に観察される。いずれも古墳時代後期のものだろう。36は須恵器の坏身である。器高が浅く、立ち上がりも短い、径は比較的大きい。湖西窯産の可能性があり、その場合Ⅲ期中段階、陶邑編年のTK43併行期に該当する。

37・38は碟で、いずれも被熱する。38の中央には使用痕と考えられる凹みが見られる。

SB220-1 (41・44)

41は非ロクロ成形の土師器皿である。内面は板ナデ、外面はナデとユビオサエが顕著である。44は瀬戸美濃窯産陶器の型打皿で、灰釉が施される。

SB220-2 (42・46)

42は瀬戸美濃窯産陶器の丸碗で、鉄釉が施される。登窯第2段階第6小期に比定される。46は銭貨の寛永通宝である。

B. 土壙

SX065 (17~26)

17~22・24は土師器である。17~20は壺の口縁部、21・22は甕の口縁部である。24は把手で、甕や鍋に付くものだろう。23は縄文土器の深鉢の底部、25は凹基式の石鉢で、欠損のため三角形・五角形のいずれかは判別できない。26は須恵器の坏の底部である。23と25は混入品だろう。

SX146 (239・240)

239・240は灰釉陶器である。239は碗の口縁部片。240は短頸壺の体部の肩付近で、外面には平行タキが見られ、内外面に自然釉が付着する。

C. 溝

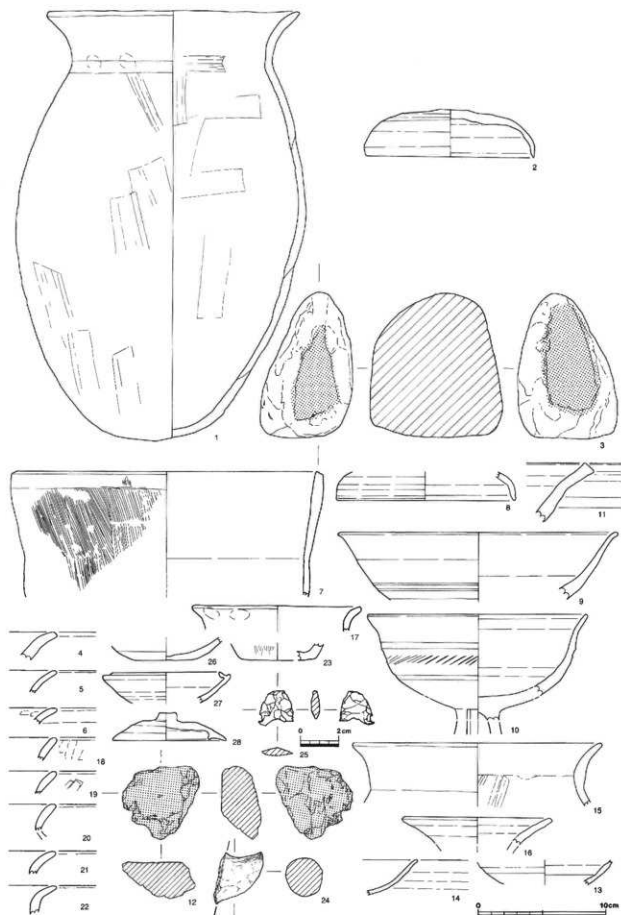
SD001 (47~52)

47は土師器の皿である。手づくね成形される。器形が深く、近世のものだろう。48~52は陶器で、48は常滑窯産、ほかは瀬戸美濃窯産である。48は甕の口縁部で、ヨコに強く引き出されて鐔状となる。18世紀後葉のものである。49は丸碗で、全面に鉄釉が施され、口縁部のみ灰釉が掛かる。50は平碗で、体部は直線的に斜め上方へ延び、底部は削出し輪高台である。灰釉が施される。51は鉄釉掛けの折縁鉢、52は鉄釉の皿で、外面には煤が付着している。50は大窯3前半に比定される古いものだが、ほかはいずれも登窯期のものである。

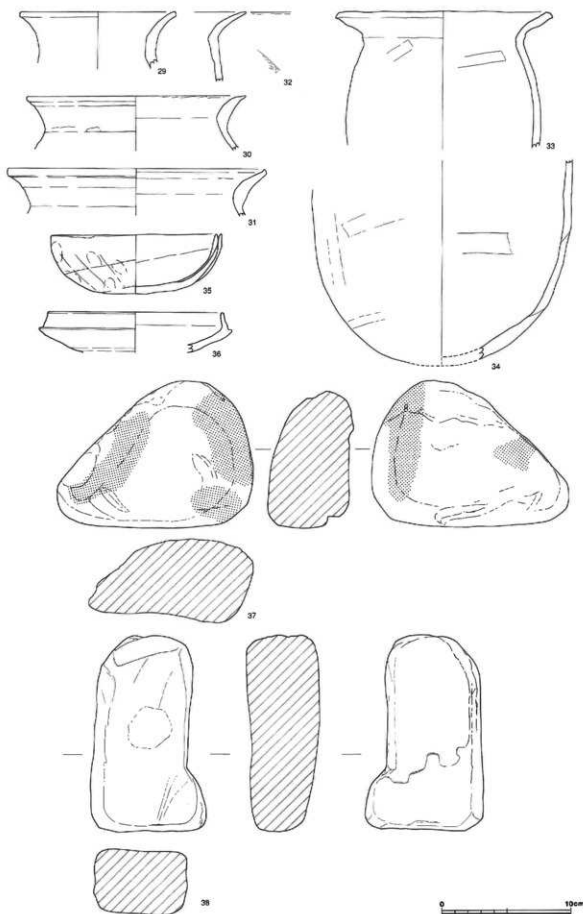
SD013 (53~57)

53・56は陶器である。53は鉄釉の土瓶で、瀬戸美濃窯産。56は呉須絵のある碗で、いわゆる陶胎染付である。いずれも近世のもの。

SD014 (58)



第19図 出土遺物実測図-1 (1/2・1/3)



第20図 出土遺物実測図-2 (1/3)

58は磁器の染付碗で、口縁部のみが遺存する。近世のもの。

SD018 (59)

59は陶器の甕型と考えられる。外面には摺絵が見られる。瀬戸美濃窯産で近世のもの。

SD030 (318・319)

318は瀬戸美濃窯陶器の志野丸皿である。削出しの高台は低く、全面に長石釉が施される。登窯第1段階第3小期に比定される。319は輸入磁器の染付碗である。高台はやや高い逆三角形を呈し、器壁は薄い。小野分類のC群に比定される。輸入磁器の出土は極めて珍しい。

SD035・045 (320～322)

320は土師器の皿で、手づくね成形される。器形が深く、近世のものだろう。321・322は灰釉陶器の壺である。321は外面に平行タタキの痕跡が見られ、322は底部付近である。

SD087 (60～71)

60～64は土師器の皿である。いずれも手づくね成形され、外面にはユビオサエが明瞭に残る。63のみ口縁端部は厚みを持つ。65～68は陶器で、66以外はすべて瀬戸美濃窯産である。65は丸碗で、全面に鉄釉が施され、口縁部には灰釉が掛かる。66は鉄釉の甕の底部。67・68は播鉢で、口縁部は外側に折り返して屈曲した口縁帯を成している。いずれも登窯期に比定される。69・70は奈良時代の製塩土器の脚部片で、混入品だろう。71は鉄滓で、丸みを帯びた碗形滓である。

SD094 (323～325)

323は土師器の半球形鍋である。遺存状態は良好で、口縁部付近は強く内湾する。調整は内面上部がハケメ状の板ナデ、下部はナデ、外面は上部がナデ・ユビオサエ、下部はヘラケズリである。近世のもの。324・325は瀬戸美濃窯産の陶器である。324は灰釉の片皿、325は播鉢で口縁部は緩く屈曲し、端部は外側に折り返して口縁帯を成す。口縁端部の一部が局所的にコブ状に高まる。時期は324が登窯第2段階第5～6小期、325が同第5小期に比定される。

SD107 (72・73)

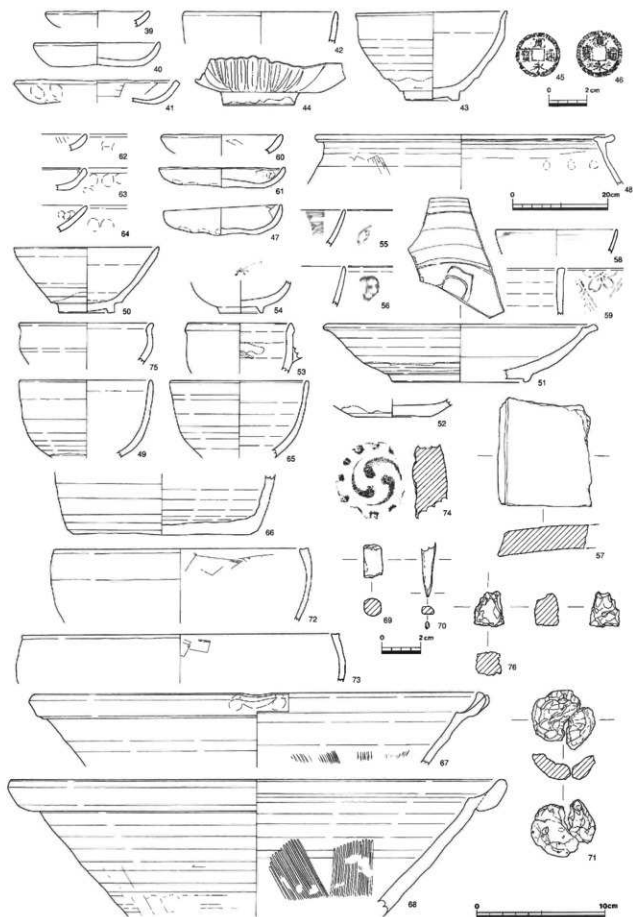
72・73は土師器の半球形鍋で、外面には煤が付着する。口縁部の内湾度は強い。近世のものだろう。

SD109 (74)

74は軒椀瓦の瓦当部分である。三巴文が見られる。

SD223 (75・76)

75は瀬戸美濃窯陶器の天目茶碗で、内外面には鉄釉が施される。口径が小さく、器壁が厚い特徴



第21図 出土遺物実測図-3 (1/2・1/3・1/8)

を持ち、登窯第2段階第5小期に比定される。76は鉄滓の小片である。

D. その他の遺構（遺構説明の無い土壌を含む）

SX038 (15)

15は土師器の甕の口縁部である。強く外反し、体部の内外面はナデ調整される。古墳時代後期のもの。

SX064 (16)

16は須恵器の長頸壺の口縁部と考えられる。端部はわずかに面を持つ。7世紀後半のもの。

SX226 (39)

39は土師器の皿である。手づくね成形され、調整は内面が板ナデ、外面はナデ・ユビオサエである。

SX215 (40)

40は土師器の皿で、手づくね成形される。深い器形で、近世のものと考えられる。

SX231 (43)

43は陶器の天目茶碗で、鉄釉が施される。輪高台となっており、器形はやや深い。瀬戸美濃窯産で、大窯末もしくは登窯第1段階第1小期に比定される。

SX230 (45)

45は銭貨の寛永通宝である。

SX040 (77～207)

SX040の出土遺物は、現地で上層・中層・下層に分けて取り上げている。上層については前項で説明したとおり、SX070との区別を把握していなかった時の遺物であり、中層・下層はその後、遺構の違いを識別してから取り上げたものである。上層についてはSX070の遺物との混合は否めないが、識別後もSX070から遺物はほとんど出土しておらず、また遺物の帰属時期にも大きな違いは認められないため、SX050とSX070は一連の遺構と考えられる。以下では、上・中・下層ごとに遺物を説明するが、基本的には出土位置の高低差をしめすものと理解されたい。

77～83・85～144・206は上層として取り上げたものである。77～82は土師器である。77～81は清郷型鍋で、口縁部はまっすぐ斜め上方に延びるものと、鐙状に水平に付くものが見られる。永井分類に従えば、77はC3類、78・81はC4類、79はC3またはC4類、80はC5類であり、いずれも10世紀前葉に比定される。82は戦国時代のくの字状口縁鍋で、明らかに混入品である。83・84は須恵器である。83は甕の口縁部で、端部は肥厚して面を成す。84は長頸壺の底部付近と考える。いずれも灰釉陶器と並行して生産されたものである。85は緑釉陶器の香炉の脚部付近である。脚部は先が欠損して

いる。ごくわずかな破片だが、本遺構より出土した緑釉陶器はこれのみである。86～144は灰釉陶器である。86～121・129～136・138は碗、中碗、深碗などの碗類、122～128・137・139～144は皿である。碗類のうち、高台の高いものが中碗や深碗に比定され、皿には明らかに段皿と認められるものは存在しない。いずれも底部は回転糸切り調整で、帰属時期は0～53～H-72号窯式期である。206は石器の石錘である。扁平な円礫の両端を打ち欠いている。縄文時代の混入品である。

145～205は中層として取り上げたものである。145～149は土師器である。145は甕の口縁部で、端部は摘み上げる。古墳時代終末期～奈良時代の甕と考えられ、混入品である。146～149は清郷型甕である。口縁部は折り曲げられて肥厚し、147・148のように羽釜状を呈したのも見られる。永井分類に従えば、146はC3・4類、147・148はC5類、149はC3類であり、いずれも10世紀前葉に比定される。150～154・196～199は須恵器である。150～154は(坏)蓋で、このうち150・152は色調や胎土から湖西窯産と考えられる。150は器高が高く、天井と口縁部との境界の稜もわずかに残る。一方154は口径が大きく、稜も明らかである。152は本来摘みを持った蓋と考えられる。154もやはり摘み付きの蓋と思われ、器形の高い点がやや異質な印象を受ける。いずれも7世紀代のもので、混入品だろう。一方196～199は無台碗で、底部は遺存するものすべて回転糸切り痕が見られ、199も大きく内弯することなく直線的な器形であり、灰釉陶器と同時存在した須恵器だろう。155～195・200は灰釉陶器である。155～186・189～193・196～199は碗類で、高台の形から深碗を識別することができる。187・188・194・195は皿類で、194は段皿である。碗・皿類は大半が底部に回転糸切り痕を残しているが、160のみへら切りされている。200は瓶類の底部付近である。灰釉陶器の帰属時期は、上層と同じく0～53～H-72号窯式期であり、前述した須恵器の無台碗も同時期と考えるべきだろう。201～205は細形の土錘である。外面はナデ調整され、一部に成形時のユビオサエが残る。他の遺跡での出土事例から、これらも灰釉陶器と同時期のものと考えて良いだろう。

207は下層として取り上げた礫で、被熱痕が見られる。用途は不明である。

SX007 (208)

208は灰釉陶器の碗の底部である。摩滅が著しいため、底部調整は判別できない。

SX041 (209)

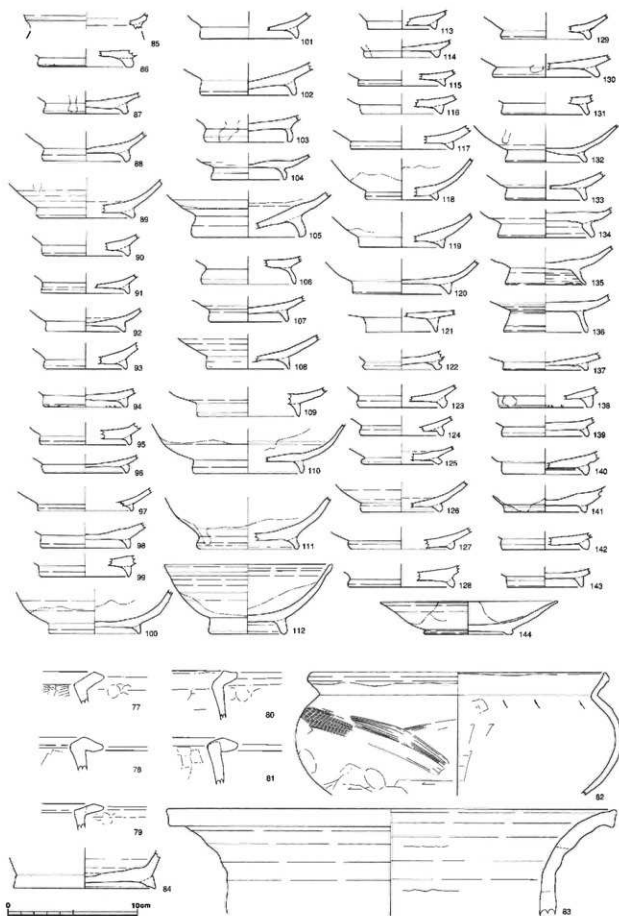
209は灰釉陶器の碗の底部で、回転糸切り痕が見られる。

SX116 (210)

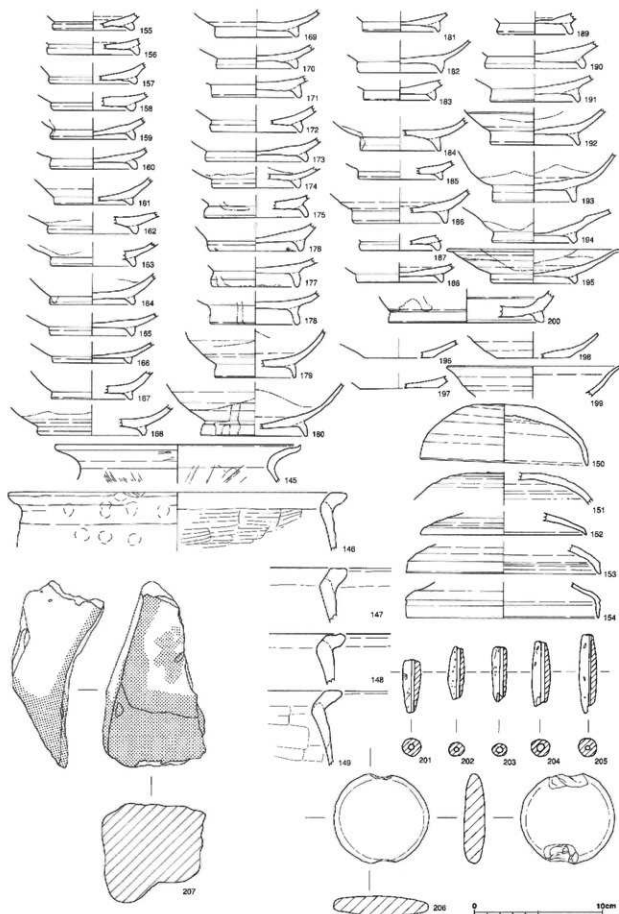
210は瀬戸美濃窯産陶器の折縁深皿の口縁部で、灰釉が掛かる。古瀬戸後Ⅱ～Ⅲ期のものである。

SX120 (211～214)

211～214は瀬戸美濃窯産陶器である。211は鉄釉の小坏、212は灰釉の丸碗、213は鉄釉丸碗で、口縁部に灰釉が施される。214は摺鉢で、口縁部付近で強く屈曲させ、口縁帯を成している。すべて登窯期のもので、212は第2段階第1小期、213は第1段階第4小期～第2段階第5小期、214は第3段



第22図 出土遺物実測図-4 (1/3)



第23図 出土遺物実測図-5 (1/3)

階第8小期にそれぞれ比定される。

SX130 (215)

215は中世常滑窯産の陶器の片口鉢で、体部の調整は板ナデである。8～9型式に比定される。

SX134 (216)

216は土師器の皿である。手づくね成形され、調整は内面がナデ、外面はナデ・ユビオサエである。

SX140 (217～227)

217～225は土師器である。217～220は皿で、すべて手づくね成形されたもので、器形が深いもの、口縁端部を強くヨコナデするものがあり、いずれも近世のものだろう。221～225は半球形鍋である。口縁部付近はいずれも内湾するが、度合いには強弱が認められる。器形がよく分かる223は、半球形鍋としてはやや浅い。226・227は瀬戸美濃窯産の陶器である。226は鉄軸の丸碗で、口縁部には灰釉が施される。227は鉄軸の折縁鉢で、内面には鉄絵が見られる。いずれも登窯期のものである。

SX141 (228)

228は鉄軸の丸碗で、口縁部には灰釉が施される。瀬戸美濃窯産で登窯期のもの。

SX144 (229・230)

229は肥前系磁器の染付碗と考えられる。230は型紙摺の磁器・染付碗で、近代のもの。

SX145 (231～238)

231は土師器の甕である。口縁部から頸部にかけて強く外反し、体部は外面にユビオサエ痕が顕著である。古墳時代終末期～奈良時代のものだろう。232は須恵器の坏蓋と考えるが、坏の可能性が高い。内面には自然釉が付着し、天井の外面には「-」のヘラ記号が見られる。湖西窯産で、Ⅳ期前段階（饒内の飛鳥Ⅱ並行）に比定される。233～237灰釉陶器である。233～236は碗、237は深碗で、底部外面は回転ヘラケズリされる。灰釉陶器の帰属時期はおおむねO-53～H-72号窯式に比定される。238は鉄滓である。

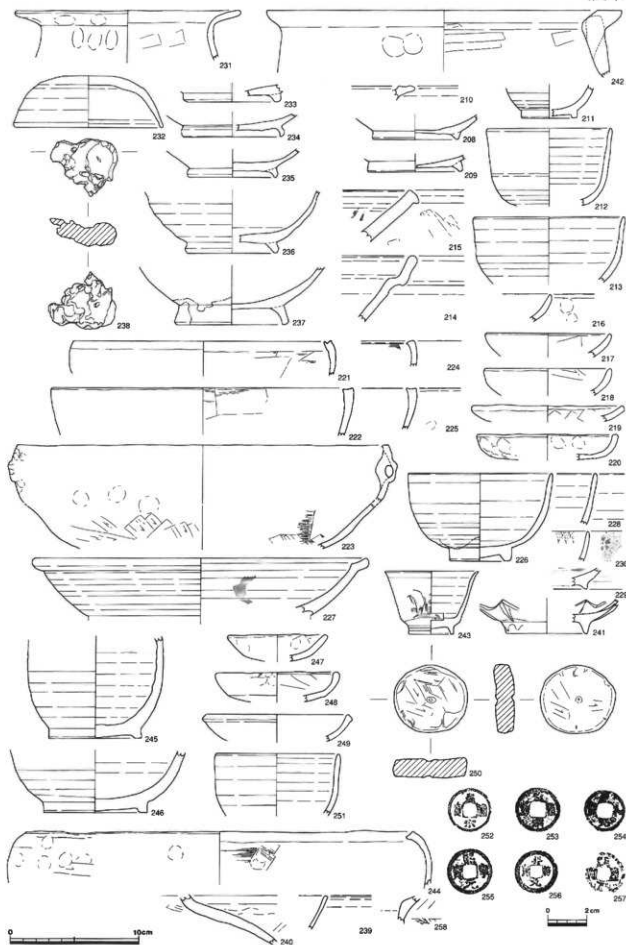
SX154 (241)

241は鉄軸の型打皿で、瀬戸美濃窯産である。

SX155 (242)

242は土師器の清郷型鍋で、口縁部はほぼ水平になる。C3類に比定され、10世紀前葉のもの。

SX161・205 (243)



第24図 出土遺物実測図一6 (1/3)

243は肥前系磁器・染付の小坏である。体部は直線的で、口縁部付近が端反となる。

SX181 (244~246)

244は土師器の半球形鍋である。口縁部は強く内弯し、内面の調整は板ナデである。近世のもの。

SX182 (247)

247は土師器の皿で、手づくね成形されたもの。調整は内面板ナデ、外面ナデ・ユビオサエである。

SX183 (248)

248は土師器の皿で、手づくね成形されたもの。口縁部は強く内弯し、内面の板ナデ痕は顕著である。

SX188 (249・250)

249・250は土師器である。249は手づくね成形の皿で、口縁端部はヨコナデして面を持つ。250は焼塩壺の蓋と考えられる。円盤状を呈し、上下面の中央には凹み程度の盲孔が見られる。

SX189 (251)

251は陶器の丸碗で、灰釉が施される。瀬戸美濃窯産で、登窯第2段階第6小期に比定される。

SX190 (252~257)

252~257は銭貨で、輸入銭貨と鍾銭とに分けられる。252・255・256は文字がはっきり表現された輸入銭貨で、252は皇宋通寶、255は熙寧元寶、256は祥符元寶である。253・254・257は文字が判読しにくく、残存状態が極めて粗悪なため鍾銭と考える。253は皇宋通寶の写しで、254は「元寶」のみ読み取ることができる。257は文字が判読できず、極めて薄い。

SX247 (258)

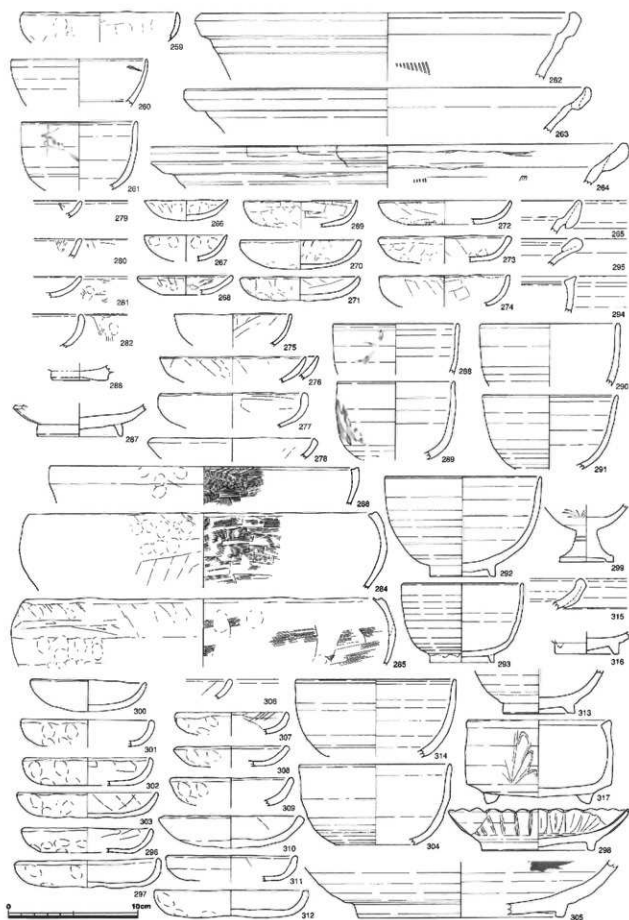
258は土師器の甕の頸部付近である。小片であり、全形を推定することはできないが、古墳時代後期のものだろう。

SX163 (259~265)

259は土師器の皿である。器形は深く、近世のもの。260は肥前系磁器の染付碗である。18世紀中葉のものだろう。261~265は瀬戸美濃窯産陶器である。261は御室茶碗で、灰釉が施されるほか、外面には鉄絵が見られる。262~265は描鉢である。いずれも口縁端部を外側に折り返して、口縁帯を成している。以上の時期は登窯第2段階第5~6小期に比定される。

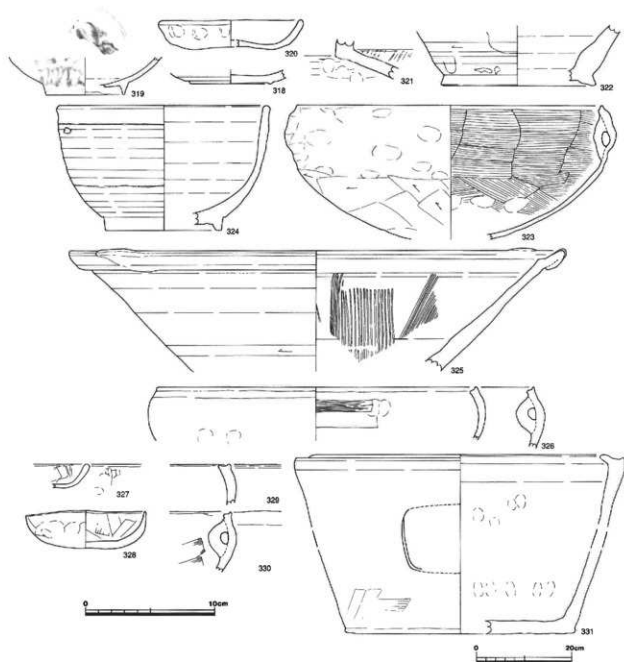
SX164 (266~295)

266~285は土師器である。266~282は皿で、すべて手づくね成形されたものである。283~285は半



第25図 出土遺物実測図-7 (1/3)

球形鍋で、いずれも口縁部は強く内弯する。内面の調整はハケメ状の板ナデである。以上の土師器はすべて近世のものである。286～295は陶器で、産地不詳の293を除くと、すべて瀬戸美濃窯産である。286は天目茶碗の底部で、高台はケズリ込みである。287は灰釉の型打皿。288・289は御室茶碗で、灰釉が施され、外面には呉須絵が見られる。290～292は丸碗である。いずれも鉄釉が施され、290・291の口縁部には灰釉が見られる。293は灰釉の丸碗で、胎土や釉調から瀬戸美濃窯以外の製品と考える。294は鉄釉の筒形香炉の口縁部片である。295は播鉢の口縁部片で、端部は内側に折り曲げる。以上の陶器は286の天目茶碗が大窯3の後半であることを除いて、登窯期のものである。特に時期は第2段階第4～7小期に集中する。



第26図 出土遺物実測図一8 (1/3・1/8)

SX100 (296~299)

296・297は土師器の皿である。手づくね成形され、器形は深い。近世のものだろう。298は陶器の菊花皿である。型づくりで、灰釉が施されている。瀬戸美濃窯産で、登窯第2段階第5小期に比定される。299は肥前系磁器の染付仏飯器である。

SX200 (300~304)

300~303は土師器の皿で、いずれも手づくね成形される。304は陶器の丸碗である。鉄釉ののち、口縁部のみ灰釉が施される。瀬戸美濃窯産で、登窯第2段階第4~5小期に比定される。

SX204 (305)

305は瀬戸美濃窯産陶器の鉄絵鉢である。全面に長石釉が施され、内面に鉄絵が描かれる。登窯第2段階第5小期に比定される。

SX225 (306~317)

306~312は土師器の皿である。いずれも手づくね成形され、口縁端部にナデ・ヨコナデを施してわずかに面となる例が多い。近世のものである。313~317はすべて瀬戸美濃窯産の陶器である。313・314は鉄釉の丸碗、315は鐙鉢の口縁部片で端部を外側に折り曲げた口縁帯がある。316は天目茶碗の底部だが、径が比較的大きい。317は鉄釉の筒形香炉である。いずれも登窯期のものだが、第1段階第3小期~第2段階第7小期と帰属時期には開きがある。

SE115 (326~331)

326~330は土師器である。326・329・330は半球形鍋の口縁部付近で、いずれも強く内弯している。327・328は手づくね成形の皿である。328は器形が深い。いずれも近世のものだろう。331は常滑窯産陶器の焼炉である。軟質の焼きで、口縁部は内側に強く引き出され、体部には窓を開ける。内面には煤が付着している。

D. 表土

27・28は須恵器である。27は坏身で、径が小さく立ち上がりは低い。28は蓋で、かえりが付き、摘みは乳頭状である。いずれも湖西窯産で、27はⅣ期前~後段階（畿内の飛鳥Ⅱ~Ⅳ並行）、28はⅣ期後段階にそれぞれ比定される。

表1 若宮遺跡出土文物觀察表

遺物番号	品名	地区	種類	形状	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	その他(mm)	重量(g)	出土	色調(色)	備考
1	S0050	K18	H 壺		196	34.2	胴部最大径22.5 頸部径13.0		80	青	赤褐色	良好
2	S0050	K18	S 杯盤		130	3.7			70	青	淡灰	良好
3	S0050	K18	H 壺		151.5	40.5	高さ130		100	青		
4	S0050	J18	H 壺		(2.2)				2	今中層	青褐色	良好
5	S0050	J18	H 壺		(1.7)				1	壺	赤褐色	不良
6	S0050	J18	H 壺		(1.2)				1	壺	赤褐色	良好
7	S0050	J18	H 壺		234	(10.0)			10	青	赤褐色	良好
8	S0050	J18	S 杯盤		130	(2.2)			10	青	灰	良好
9	S0050	J18	K 中瓶		21.6	(5.4)			20	青	淡灰	良好
10	S0050	J18	S 物置高坪		17.0	(8.5)			30	青	淡灰	良好
11	S0050	J18	S 土器鉢		(4.6)				5	青	淡灰	良好
12	S0050	J18	R 壺		151.5	40.5	高さ96.6		10	青		
13	S0050	J18	S 杯盤		(2.0)				10	青	淡灰	良好
14	S0050	J20	K 中瓶		(2.8)				10	青	淡灰	今中層
15	S0050	J18	H 壺		186	(5.0)		頸部径17.2	5	青	明赤褐色	良好
16	S0050	J20	S 灰釉器		11.8	(2.1)			5	青	淡灰	良好
17	S0050	J16	H 壺		13.3	(2.0)			5	今中層	明赤褐色	良好
18	S0050	J16	H 壺		(1.8)				5	今中層	淡褐色	良好
19	S0050	J16	H 壺		(1.8)				3	今中層	淡褐色	良好
20	S0050	J16	H 壺		(2.1)				3	今中層	淡褐色	良好
21	S0050	J16	H 壺		(1.8)				5	今中層	淡褐色	良好
22	S0050	J16	H 壺		(2.3)				5	今中層	淡褐色	良好
23	S0050	J16	J 深鉢		(1.3)	6.0			3	今中層	暗赤褐色	良好
24	S0050	J16	H 把手						3	今中層	淡褐色	良好
25	S0050	J16	R 白磁		高さ1.5	幅1.5	高さ6.4	長さ1.3	60			
26	S0050	J16	S 杯		(1.8)	4.3			40	青	淡灰	良好
27	S0050	J16	S 杯盤		8.4	(2.4)			30	青	淡灰	良好
28	S0050	J16	S 杯盤		8.7	2.2			95	青	淡灰	良好
29	S0050	J18	H 壺		12.1	(4.5)		頸部径5.5	5	青	灰褐色	良好
30	S0050	J18	H 壺		17.0	(4.3)		頸部径9.2	5	青	淡褐色	良好
31	S0050	J18	H 壺		19.8	(3.7)			5	今中層	淡褐色	良好
32	S0050	J18	H 壺		(5.6)				2	青	赤褐色	良好
33	S0050	J18	H 壺		16.0	(10.9)	頸部径7.8 胴部最大径10.1		16	青	赤褐色	良好
34	S0050	J18	H 壺		146.3		胴部最大径13.5		30	青	赤褐色	良好
35	S0050	J18	H 壺		13.3	4.7			90	今中層	淡褐色	良好
36	S0050	J18	S 杯盤		12.8	(3.2)			10	青	淡灰	良好
37	S0050	J18	R 壺		151.7	40.5	高さ6.7	長さ16.8	95			
38	S0050	J18	K 瓶口		155.6	47.4	高さ5.4	長さ13.1	100			
39	S0050	K14	H 壺		7.8	(1.2)			3	青	淡褐色	良好
40	S0050	K14	H 壺		9.8	(1.9)			20	青	淡褐色	良好
41	S0050-1	K14	H 壺		12.5	(1.9)			10	青	淡褐色	良好
42	S0050-2	K14	T 丸瓶		11.7	(2.5)			5	青	淡褐色	良好
43	S0050	K13	T 大目茶碗		11.6	7.1	4.0		95	青	淡褐色	良好
44	S0050-1	L13	T 浅口鉢		(3.6)	5.4			40	青	淡褐色	良好
45	S0050	K14	T 寶永通寶		径2.3	厚0.1	重量2.6					
46	S0050-2	K13	T 丸瓶		9.2	2.1	高さ1.5	長さ1.5				
47	S0050	K17	H 壺		12	(1.8)			40	青	淡褐色	良好
48	S0050	K18	T 壺		63.8	(10.8)			3	青	暗赤褐色	良好
49	S0050	K18	T 丸瓶		10.2	(6.1)			30	青	淡褐色	良好
50	S0050	J18-17	T 平鉢		11.2	5.2	4.4		40	青	淡褐色	良好
51	S0050	K18	T 灰釉器		20.8	(4.6)	10.7		10	青	淡褐色	良好
52	S0050	K17	T 壺		(1.4)	6.0			10	青	淡褐色	良好
53	S0050	J17	T 土瓶		8.0	(4.9)			5	青	淡褐色	良好
54	S0050	J17	T 瓶		(2.6)	3.2			15	青	白	良好
55	S0050	J17	T 瓶		(2.9)				5	青	白	良好
56	S0050	J17	T 瓶		(3.2)				5	青	淡褐色	良好
57	S0050	J17	H 中瓶		151.7	40.5	高さ1.9		10	青	暗灰	良好
58	S0050	K16-17	T 瓶		9.8	(1.8)			5	青	白	良好
59	S0050	J17	T (蟹蓋)		(3.6)				10	青	淡褐色	良好
60	S0050	J18	T 皿		9.5	(1.5)			5	青	淡褐色	良好
61	S0050	K16-17	T 皿		3.9	1.5			50	青	淡褐色	良好
62	S0050	J18	T 皿		(1.3)				5	青	淡褐色	良好
63	S0050	K16-17	H 壺		(1.8)				10	青	淡褐色	良好
64	S0050	K16-17	H 壺		(2.1)				10	青	淡褐色	良好
65	S0050	K16-17	T 丸瓶		10.6	(6.1)			20	青	淡褐色	良好
66	S0050	K16-L17	T 壺		(4.9)	13.8			10	青	淡褐色	良好
67	S0050	K16-17-J16	T 深鉢		34.8	(5.8)			10	青	淡褐色	良好
68	S0050	K16-17	T 深鉢		38.8	(10.9)			20	青	淡褐色	良好
69	S0050	K16-17	H 瓶口土器		高さ1.7	幅1.0	高さ0.5		5	青	暗褐色	良好
70	S0050	K16-17	H 瓶口土器		高さ2.4	幅1.5-0.6	高さ0.4		5	青	暗褐色	良好
71	S0050	K16-17	T 深鉢		(5.3)	高さ2.0	高さ0.8	長さ27.3	70			
72	S0050	J16	H 壺		19.8	(5.4)			5	青	暗褐色	良好
73	S0050	J16	H 壺		24.8	(3.8)			2	青	赤褐色	良好
74	S0050	J16	H 中瓶		高さ2.6				40	青	淡灰	良好
75	S0050	J13-14	T 大目茶碗		16.3	(3.3)			10	青	淡褐色	良好
76	S0050	J13-14	T 深鉢		151.7	40.5	高さ1.8					
77	S0050上層	J19-20	T 皿		(2.5)				1	今中層	赤褐色	良好
78	S0050上層	J19-20	H 壺		(2.6)				2	今中層	赤褐色	良好
79	S0050上層	J19-20	H 壺		(2.6)				1	今中層	赤褐色	良好
80	S0050上層	J19-20	H 壺		(3.7)				1	今中層	赤褐色	良好
81	S0050上層	J19-20	H 壺		(3.6)				3	今中層	赤褐色	良好
82	S0050上層	J19-20	T 皿		33.0	(9.7)			30	青	淡褐色	良好
83	S0050上層	J19-20	S 壺		36.3	(8.2)			10	青	淡灰	良好

J：縄文土器、Y：弥生土器、H：土師器、S：須恵器、K：灰釉陶器、G：緑釉陶器、P：山茶碗、

[illegible]

T:陶器、Z:磁器、R:石器、I:金屬器、N:瓦、D:土製品

遺構番号	遺構	地区	種類	部類	口径 (cm)	深さ (cm)	底径 (cm)	その他 (cm/g)	残存率 (%)	出土	色調 (色)	構成
84	SX040上層	J19-20	S	瓦葺		3.0	11.0		5	密	赤灰	良好
85	SX040上層	J19-20	G	管状		1.3	8.4		5	密	赤灰	良好
86	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.3	7.2		5	密	赤灰	良好
87	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.8	6.2		30	密	赤灰	良好
88	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.3	6.6		30	密	赤灰	良好
89	SX040上層	J19-20	K	瓦		3.1	7.2		30	密	赤灰	良好
90	SX040上層	J19-20	K	瓦		3.7	6.6		5	密	赤灰	良好
91	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.5	6.8		20	密	赤灰	不真
92	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.9	6.1		15	密	赤灰	良好
93	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.1	6.0		10	密	赤灰	良好
94	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.5	6.3		15	密	赤灰	良好
95	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.7	7.0		10	密	赤灰	良好
96	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.4	6.4		5	密	赤灰	良好
97	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.8	7.2		10	密	赤灰	良好
98	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.0	6.8		30	密	赤灰	良好
99	SX040上層	J19-20	K	深鉢		1.7	6.8		5	密	赤灰	良好
100	SX040上層	J19-20	K	瓦		3.5	7.0		30	密	赤灰	良好
101	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.0	7.5		10	密	赤灰	良好
102	SX040上層	J19-20	K	深鉢		2.6	7.2		20	密	赤灰	やや不真
103	SX040上層	J19-20	K	深鉢		2.1	6.6		20	密	赤灰	良好
104	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.1	5.8		30	密	赤灰	良好
105	SX040上層	J19-20	K	中鉢		3.6	8.2		10	密	赤灰	良好
106	SX040上層	J19-20	K	深鉢		2.0	7.2		10	密	赤灰	良好
107	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.0	6.1		15	密	赤灰	良好
108	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.7	6.4		20	密	赤灰	良好
109	SX040上層	J19-20	K	深鉢		2.3	7.8		10	密	赤灰	良好
110	SX040上層	J19-20	K	深鉢		3.0	8.3		20	密	赤灰	良好
111	SX040上層	J19-20	K	深鉢		4.1	7.6		30	密	赤灰	良好
112	SX040上層	J19-20	K	瓦		5.5	2.5		20	密	赤灰	良好
113	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.5	5.3		20	密	赤灰	不真
114	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.4	3.7		20	密	赤灰	良好
115	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.2	6.8		10	密	赤灰	不真
116	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.5	6.3		10	密	赤灰	良好
117	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.8	8.0		10	密	赤灰	良好
118	SX040上層	J19-20	K	瓦		5.5	6.6		20	密	赤灰	良好
119	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.7	6.6		10	密	赤灰	良好
120	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.7	7.6		15	密	赤灰	良好
121	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.7	5.6		15	密	赤灰	良好
122	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.5	5.6		10	密	赤灰	良好
123	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.8	6.6		10	密	赤灰	良好
124	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.5	6.5		20	密	赤灰	やや不真
125	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.4	5.8		10	密	赤灰	良好
126	SX040上層	J19-20	K (瓦)		1.7	7.8		10	密	赤灰	良好	
127	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.4	6.2		15	密	赤灰	良好
128	SX040上層	J19-20	K (瓦)		1.7	8.3		10	密	赤灰	良好	
129	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.0	6.6		20	密	赤灰	やや不真
130	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.8	8.2		20	密	赤灰	良好
131	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.6	6.6		10	密	赤灰	良好
132	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.5	6.2		20	密	赤灰	良好
133	SX040上層	J19-20	K	瓦		2.2	6.0		20	密	赤灰	良好
134	SX040上層	J19-20	K	深鉢		2.0	7.3		20	密	赤灰	良好
135	SX040上層	J19-20	K	深鉢		3.1	6.2		25	密	赤灰	良好
136	SX040上層	J19-20	K	深鉢		3.0	6.4		30	密	赤灰	良好
137	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.4	6.4		10	密	赤灰	良好
138	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.7	7.0		10	密	赤灰	良好
139	SX040上層	J19-20	K (瓦)		1.5	6.6		20	密	赤灰	良好	
140	SX040上層	J19-20	K	瓦		1.8	6.4		15	密	赤灰	良好
141	SX040上層	J19-20	K (瓦)		1.6	6.4		20	密	赤灰	良好	
142	SX040上層	J19-20	K (瓦)		1.3	6.6		10	密	赤灰	やや不真	
143	SX040上層	J19-20	K (瓦)		1.5	5.8		20	密	赤灰	良好	
144	SX040中層	J19-20	K	瓦	13.8	2.6	6.8		50	密	赤灰	良好
145	SX040中層	J19-20	H	管状	19.2	3.0			5	密	赤灰	良好
146	SX040中層	J19-20	H	管状	26.2	4.0			5	密	赤灰	良好
147	SX040中層	J19-20	H	管状		4.3			3	密	赤灰	良好
148	SX040中層	J19-20	H	管状		4.0			3	密	赤灰	良好
149	SX040中層	J19-20	H	管状		3.9			3	密	赤灰	良好
150	SX040中層	J19-20	S	坪倉	13.0	4.6			40	密	赤灰	良好
151	SX040中層	J19-20	S	坪倉	06.0	2.5			15	密	赤灰	良好
152	SX040中層	J19-20	S	坪倉	13.0	1.7			20	密	赤灰	良好
153	SX040中層	J19-20	S	坪倉	15.1	2.3			10	密	赤灰	良好
154	SX040中層	J19-20	S	坪倉	15.0	2.8			5	密	赤灰	良好
155	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.4	6.0		20	密	赤灰	やや不真
156	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.3	7.0		20	密	赤灰	やや不真
157	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.7	6.6		20	密	赤灰	良好
158	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.4	6.2		20	密	赤灰	良好
159	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.7	6.4		10	密	赤灰	良好
160	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.7	6.6		10	密	赤灰	良好
161	SX040中層	J19-20	K	瓦		2.1	6.0		10	密	赤灰	不真
162	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.7	6.8		10	密	赤灰	良好
163	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.8	6.4		5	密	赤灰	良好
164	SX040中層	J19-20	K	瓦		2.5	6.4		20	密	赤灰	良好
165	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.8	6.4		20	密	赤灰	良好
166	SX040中層	J19-20	K	瓦		1.7	6.0		10	密	赤灰	良好
167	SX040中層	J19-20	K	瓦		2.2	6.2		15	密	赤灰	良好
168	SX040中層	J19-20	K	瓦		2.8	8.3		20	密	赤灰	良好

遺物番号	遺構	地区	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	その他 (cm-g)	残存率 (%)	胎土	色澤 (色)	備考
169	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.1)	6.2			30	密	淡灰褐	良好
170	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.9)	6.2			40	密	淡灰	良好
171	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.7)	6.8			20	密	淡灰	良好
172	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.1)	7.0			20	密	淡灰	今午不点
173	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.8)	6.8			25	密	淡灰	良好
174	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.5)	6.8			15	密	淡灰	良好
175	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.7)	8.0			10	密	淡灰	良好
176	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.2)	7.0			30	密	淡灰	良好
177	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.2)	6.6			30	密	淡灰	良好
178	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.7)	6.7			20	密	淡灰	良好
179	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.9)	6.2			20	密	淡灰褐	良好
180	SX340-中層	J19-20	K	甕	(4.1)	8.3			30	密	淡灰	良好
181	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.5)	5.8			20	密	淡灰白	不点
182	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.6)	6.4			30	密	淡灰	良好
183	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.6)	5.4			15	密	灰	良好
184	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.6)	6.0			10	密	淡灰	良好
185	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.5)	6.4			5	密	淡灰	良好
186	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.6)	7.2			20	密	淡灰	良好
187	SX340-中層	J19-20	K	(甕)	(1.3)	6.0			5	密	淡灰	良好
188	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.4)	6.6			10	密	淡灰	良好
189	SX340-中層	J19-20	K	甕	(1.7)	5.6			15	密	淡灰	良好
190	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.1)	7.6			40	密	淡灰	良好
191	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.1)	6.8			30	密	淡灰白	不点
192	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.8)	7.8			30	密	淡灰	良好
193	SX340-中層	J19-20	K	甕	(4.0)	6.2			40	密	淡灰	良好
194	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.7)	6.1			30	密	淡灰	良好
195	SX340-中層	J19-20	K	甕	13.4	2.7	6.5		50	密	淡灰	良好
196	SX340-中層	J19-20	S	甕	(1.4)	5.4			10	密	灰	良好
197	SX340-中層	J19-20	S	甕	(3.9)	6.2			5	密	淡灰	良好
198	SX340-中層	J19-20	S	甕	(2.6)	6.0			25	密	淡灰	良好
199	SX340-中層	J19-20	S	甕	13.4	2.4	5.0		10	密	淡灰	今午点群
200	SX340-中層	J19-20	K	甕	(2.5)	12.0			10	密	淡灰	良好
201	SX340-中層	J19-20	D	土罐	長さ22 最大径10.5 重量6.4				70	密	淡灰白	良好
202	SX340-中層	J19-20	D	土罐	長さ27 最大径10.8 重量4.2				90	中々密	淡灰	良好
203	SX340-中層	J19-20	D	土罐	長さ28 最大径10.5 重量3.8				90	密	淡灰白	良好
204	SX340-中層	J19-20	D	土罐	長さ35 最大径11.0 重量7.8				80	密	淡灰	良好
205	SX340-中層	J19-20	D	土罐	長さ34 最大径11.0 重量5.1				90	密	淡灰	良好
206	SX340-上層	J19-20	B	土罐	径7.4 厚さ1.6 重量1.30				90			
207	SX340-下層	J19-20	B	土罐	長さ34.8 径10.5 厚さ5.6 重量32.1							
208	SX307	K19	K	甕	(1.8)	6.6			20	密	淡灰褐	不点
209	SX341	J19	K	甕	(1.3)	7.4			10	密	淡灰	良好
210	SX316	K1.16	T	片断	(1.1)				1	密	淡灰	良好
211	SX320	L16	T	片断	2.6	2.6	4.2		20	密	淡灰	良好
212	SX320	L16	T	片断	5.6	6.8			10	密	淡灰	良好
213	SX330	L16	T	片断	11.6	6.3			20	密	淡灰	良好
214	SX320	L16	T	片断	(5.2)				3	密	淡灰	良好
215	SX320	L16	T	片断	(4.1)				5	密	淡灰	良好
216	SX334	L15	H	甕	(2.2)				5	密	淡灰	良好
217	SX335	L15	H	甕	9.6	1.9			10	密	淡灰	良好
218	SX340	L15	H	甕	9.7	(2.1)			10	密	淡灰	良好
219	SX340	L15	H	甕	11.8	(2.2)			5	密	淡灰	良好
220	SX330	L15	H	甕	10.8	(2.0)			25	密	淡灰	良好
221	SX340	L15	H	甕	20.0	(2.7)			2	密	淡灰	良好
222	SX340	L15	H	甕	23.4	(3.7)			3	密	淡灰	良好
223	SX340	L15	H	甕	20.0	(8.2)			5	密	淡灰	良好
224	SX340	L15	H	甕	(2.0)				1	密	淡灰	良好
225	SX340	L15	H	甕	(3.2)				1	密	淡灰	良好
226	SX340	L15	T	片断	11.2	7.0	4.7		60	密	淡灰	良好
227	SX340	L15	T	片断	26.0	(4.6)			5	密	淡灰	良好
228	SX341	L15	T	片断	(4.1)				5	密	淡灰	良好
229	SX341	L15	Z	(甕)	(1.7)				5	密	淡灰白	良好
230	SX344	L15	Z	甕	(2.4)				5	密	白	良好
231	SX345	KL15-16	H	甕	17.4	(4.6)			5	中々密	淡灰	良好
232	SX345	KL15-16	S	甕	11.6	4.1			70	密	淡灰	良好
233	SX345	L15	K	甕	(1.4)	6.9			10	密	淡灰	良好
234	SX345	L15	K	甕	(1.8)	7.5			10	密	淡灰	良好
235	SX345	KL15-16	K	甕	(2.2)	6.8			30	密	淡灰	良好
236	SX345	KL15-16	K	甕	(4.9)	7.0			25	密	淡灰	良好
237	SX345	L15	K	甕	(1.6)	8.4			60	密	淡灰	良好
238	SX345	L15-16	T	片断	径4.6 高さ2.2 重量30.3				5	密	淡灰	良好
239	SX346	H18	K	甕	(3.8)				5	密	淡灰	良好
240	SX346	H18	K	甕	(3.8)				5	密	淡灰	良好
241	SX354	K15-L15	T	片断	(2.8)	6.3			15	密	淡灰	良好
242	SX355	K15	H	甕	27.6	(4.9)			5	中々密	淡灰	良好
243	SX361-205	K15-L14	Z	小片	7.4	5.0	3.4		25	密	白	良好
244	SX361	H15	H	甕	30.2	(4.8)			5	密	淡灰	良好
245	SX361	K15	T	片断	(6.1)	7.2			40	密	淡灰	良好
246	SX361-183	K15	T	片断	(4.8)	8.0			30	密	淡灰	良好
247	SX382	K15	H	甕	7.5	(2.1)			10	密	淡灰	良好
248	SX383	K15	H	甕	9.5	(2.3)			15	密	淡灰	良好
249	SX388	J16	H	甕	11.0	(2.1)			10	密	淡灰	今午点群
250	SX388	J16	H	(甕)	径5.5-5.8 高さ径0.5-0.7 厚さ1.5 重53.1				100	中々密	淡灰	良好
251	SX389	J16	T	片断	9.6	(4.8)			10	密	淡灰白	良好
252	SX390	J15	1	甕	径2.3 厚さ0.1 重量23.4				100			
253	SX390	J15	1	甕	径2.4 厚さ0.1 重量23.4				100			

[illegible]

遺物番号	遺構	地区	種類	口径 (cm)	径高 (cm)	底径 (cm)	その他 (cm-g)	残存率 (%)	出土	色調 (色)	備考
254	SX100	J15	1 銅貨				径2.2 厚0.1 重量1.5 g	100			
255	SX100	J15	1 銅貨				径2.4 厚0.1 重量2.5 g	100			
256	SX100	J15	1 銅貨				径2.3 厚0.1 重量2.5 g	95			
257	SX100	J15	1 銅貨				径1.9 厚0.1 重量1.2 g	90			
258	SX102	J13	1 銅貨					2	中層	銅緑色	良好
259	SX103	K15	1 銅貨		9.3	(2.2)		5	表層	銅緑色	良好
260	SX103	K15	2 銅貨		10.6	(3.7)		10	表層	銅緑白	良好
261	SX103	K15	1 銅貨		8.0	(3.4)		20	表層	銅緑色	良好
262	SX103	K15	1 銅貨		29.0	(5.3)		2	表層	銅緑色	良好
263	SX103	K15	1 銅貨		31.3	(2.6)		2	表層	銅緑色	良好
264	SX103-104	K15	1 銅貨		27.4	(3.2)		5	表層	銅緑色	良好
265	SX103	K15	1 銅貨			(2.6)		1	表層	銅緑色	良好
266	SX104	K15	1 銅貨		6.6	(1.6)		20	表層	銅緑色	良好
267	SX104	K15	1 銅貨		6.5	(2.1)		15	表層	銅緑色	良好
268	SX104	K15	1 銅貨		7.4	(1.3)		5	表層	銅緑色	良好
269	SX104	K15	1 銅貨		7.6	2.1		20	表層	銅緑色	良好
270	SX104	K15	1 銅貨		9.2	2.3		50	表層	銅緑色	良好
271	SX104	K15	1 銅貨		9.0	1.9		95	表層	銅緑色	良好
272	SX104	K15	1 銅貨		10.2	(1.9)		15	表層	銅緑色	良好
273	SX104	K15	1 銅貨		9.8	(2.1)		10	表層	銅緑色	良好
274	SX104	K15	1 銅貨		10.2	(2.4)		15	表層	銅緑色	良好
275	SX104	K15	1 銅貨		9.3	(2.5)		5	表層	銅緑色	良好
276	SX104	K15	1 銅貨		11.3	(2.9)		10	表層	銅緑色	良好
277	SX104	K15	1 銅貨		11.2	(2.7)		10	表層	銅緑色	良好
278	SX104	K15	1 銅貨		12.6	(1.6)		10	表層	銅緑色	良好
279	SX104	K15	1 銅貨			(1.3)		3	表層	銅緑色	良好
280	SX104	K15	1 銅貨			(1.5)		5	表層	銅緑色	良好
281	SX104	K15	1 銅貨			(1.7)		10	表層	銅緑色	良好
282	SX104	K15	1 銅貨			(2.6)		10	表層	銅緑色	良好
283	SX104	K15	1 銅貨		24.0	(2.0)		2	表層	銅緑色	良好
284	SX104	K15	1 銅貨		27.1	(5.6)		3	表層	銅緑色	良好
285	SX104	K15	1 銅貨		27.8	(5.3)		5	表層	銅緑色	良好
286	SX104	K14	1 天目銅貨			(1.2)	4.2	10	表層	銅緑色	良好
287	SX104	K15	1 銅貨		(2.6)		6.4	30	表層	銅緑白	良好
288	SX104	K15	1 銅貨		9.8	(4.0)		15	表層	銅緑色	良好
289	SX104	K15	1 銅貨		9.2	(6.2)		15	表層	銅緑色	良好
290	SX104	K15	1 銅貨		10.5	(5.0)		20	表層	銅緑色	良好
291	SX104	K14	1 銅貨		10.4	(5.0)		25	表層	銅緑色	良好
292	SX103-104	K15-K15	1 銅貨		8.0	5.0		60	表層	銅緑色	良好
293	SX104	K15	1 銅貨		9.4	6.3	5.0	60	表層	銅緑白	良好
294	SX104	K15	1 銅貨		(2.9)			3	表層	銅緑色	良好
295	SX104	K15	1 銅貨			(2.1)		1	表層	銅緑色	良好
296	SX100	L15	1 銅貨		10.0	2.0		30	表層	銅緑色	良好
297	SX100	L15	1 銅貨		10.9	2.3		70	表層	銅緑色	良好
298	SX100	L15	1 銅貨		11.8	3.3	8.6	30	表層	銅緑色	良好
299	SX100	L14	2 銅貨			(4.4)	4.2	60	表層	白	良好
300	SX100	L14	1 銅貨		8.8	2.6		100	表層	銅緑色	良好
301	SX100	L14	1 銅貨		10.0	(2.1)		5	表層	銅緑色	良好
302	SX100	L14	1 銅貨		9.7	2.2		20	表層	銅緑色	良好
303	SX100	L14	1 銅貨		10.7	2.1		20	表層	銅緑色	良好
304	SX100-204	L14	1 銅貨		11.7	(5.4)		40	表層	銅緑色	良好
305	SX100	L14	1 銅貨			(4.5)	8.0	20	表層	銅緑色	良好
306	SX225	JR12-14	1 銅貨			(1.5)		5	表層	銅緑色	良好
307	SX225	K15	1 銅貨		8.6	(1.8)		10	表層	銅緑色	良好
308	SX225	J15	1 銅貨		8.6	(1.6)		25	表層	銅緑色	良好
309	SX225	K14	1 銅貨		9.5	(1.2)		15	表層	銅緑色	良好
310	SX225	K14	1 銅貨		10.6	2.6		35	表層	銅緑色	良好
311	SX225	J15	1 銅貨		10.1	(2.0)		15	表層	銅緑色	良好
312	SX225	K14	1 銅貨		12.0	2.2		30	表層	銅緑色	良好
313	SX225	K14	1 銅貨			(3.5)	5.4	30	表層	銅緑色	良好
314	SX225	K14-15	1 銅貨		12.4	(6.1)		30	表層	銅緑色	良好
315	SX225	K14	1 銅貨			(2.9)		1	表層	銅緑色	良好
316	SX225	K14	1 銅貨			(1.8)	4.8	10	表層	銅緑色	良好
317	SX100-225	L15-K14	1 銅貨		11.0	6.7		20	表層	銅緑色	良好
318	SX000	L17	1 銅貨			(1.1)	6.2	20	表層	銅緑色	良好
319	SX000	L18	1 銅貨			(2.9)	6.2	10	表層	白	良好
320	SX000-045	L19	1 銅貨		11.4	2.3		25	表層	銅緑色	良好
321	SX000	L18	1 銅貨			(3.2)		2	表層	銅緑色	良好
322	SX000-045	L19	1 銅貨			(4.8)	11.6	3	表層	銅緑色	良好
323	SX000	K16-17-L16	1 銅貨		23.8	(10.6)		20	表層	銅緑色	良好
324	SX000	K16-17-L16	1 銅貨		16.0	9.9	9.0	25	表層	銅緑色	良好
325	SX000	K16-17-L16	1 銅貨		36.6	(9.6)		10	表層	銅緑色	良好
326	SX112	L16	1 銅貨		34.8			5	表層	銅緑色	良好
327	SX115	L16	1 銅貨			(2.0)		10	表層	銅緑色	良好
328	SX115	L16	1 銅貨		9.4	3.0		90	表層	銅緑色	良好
329	SX115	L16	1 銅貨			(3.2)		1	表層	銅緑色	良好
330	SX115	L16	1 銅貨		24.5	(4.2)		3	表層	銅緑色	良好
331	SX115	L16	1 銅貨		30.0	(16.5)	24.2	15	表層	銅緑色	良好

参考文献

■湖西窯産須恵器

鈴木敏則 2001 「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 東海土器研究会

■清郷型鍋

費 元洋 1997 「須恵器から灰釉陶器へ」『三河考古』第10集 三河考古学談話会

■渥美窯製品

藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター

■貿易陶磁

小野正敏 1994 「日本出土の貿易陶磁」『国立歴史民俗博物館資料調査報告書』5 国立歴史民俗博物館

■古瀬戸・瀬戸美濃大窯製品

藤澤良祐 2005 「瀬戸美濃と志戸呂・初山」『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料集』発表要旨・論考編
菊川シンポジウム実行委員会

■瀬戸美濃登窯製品

藤澤良祐 2006 「瀬戸・美濃登窯製品の生産と流通」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』
財瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター

■中世常滑窯製品

中野晴久 2005 「常滑・渥美窯」『陶磁器から見る静岡県の中世社会 資料集』発表要旨・論考編
菊川シンポジウム実行委員会

■近世常滑窯製品

中野晴久 2006 「生産③ 常滑窯」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』
財瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター